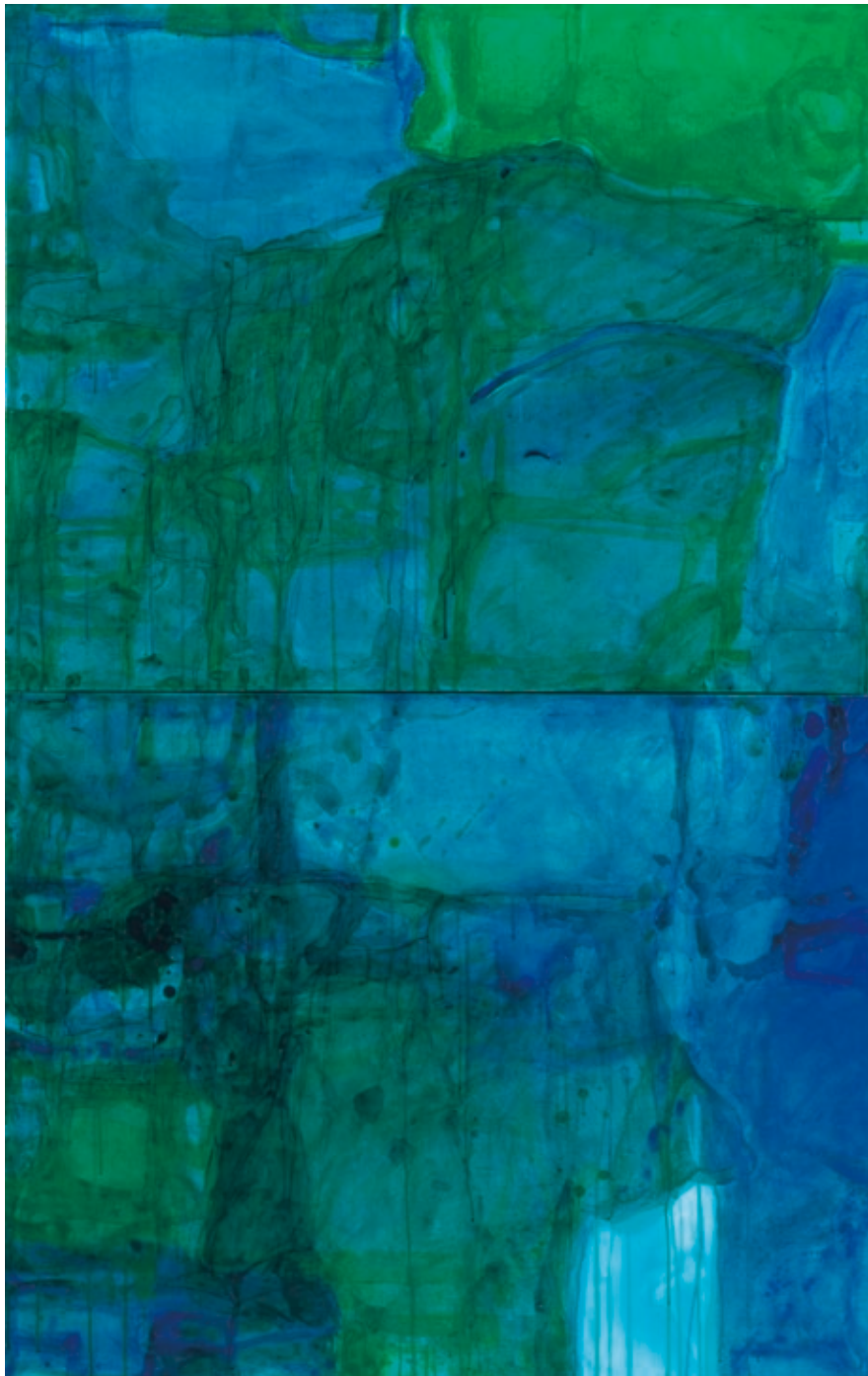


# 女子美

No.166/2010



継岡リツ「メランコリアA・B」

- P2 新入生のみなさんへ
- P3 2010年度新任教員からのメッセージ
- P4 退職教員からのメッセージ
- P5 付属高校・中学校 継岡リツ学校長インタビュー
- P6 デザイナー 矢野りんさんインタビュー
- P9 南島宏教授 東京五美術大学連合卒業・修了制作展記念講演 報告
- P10 女子美スタイル☆最前線 ギャラリートーク
- P14 アート・デザイン表現学科 トークイベント報告
- P16 海外スプリング・スクール 報告
- P17 スクール・オブ・ヴィジュアル・アーツ学術交流協定締結 他
- P18 関東海理化電機製作所産学協同プロジェクト 報告
- P19 相模大野駅のディスプレイアートを制作 他
- P20 注染プロジェクト発表展示 他
- P21 第10回パリ賞受賞者 いしばしめくみさんエッセイ
- P22 2009年度卒業（修了）制作展 報告
- P25 女子美アートミュージアム展覧会情報
- P26 杉田敦教授編集「アートで生きる」出版 他

女子美術大学広報誌

## Message ● ① 新入生のみなさんへ



学校法人女子美術大学  
理事長 大村 智  
(おおむら さとし)



学長 佐野 めい  
(さの めい)

ご入学おめでとうございます。

新入生の皆様には、学園生活の中で個性を確立し歩むべき道を見極め、将来の大いなる飛翔のために備えていただきたいと思います。

人生で最も尊いことは、個性と創造性をもって、いかに社会に貢献するかであると思います。このような気概を持つことで、人生が一層の輝きを増すことになります。これは、本学創立時の苦難の物語を学ぶことにより理解できます。

女子美術大学は、女性に美術教育を施すことで自立した女性を育てることを目的に、110年前、創立者の横井玉子、佐藤志津両先生の献身的な努力によって設立されました。本学を卒業した多くの先輩方は、独創的でしっかりした仕事を持ち、多方面で活躍しています。この先輩たちの生き方は、皆様の人生のこの上ない手本になると思います。学生生活の中で創立者の両先生をはじめ先人たちが何を求め、いかに生き、いかに創造性豊かな世界を切り開いてこれたかを学んでいただきたいと思います。

皆様には、無限の可能性が開かれています。女子美術大学110年の歴史の根底にある不撓不屈の精神を受け継ぎ、自身の目標をしっかりと定め自己を磨き、充実した日々を送られますよう期待しています。

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

春4月、女子美術大学へ進学なさったみなさんを、本学学生としてお迎えできまして、大変うれしいです。

2010年、女子美術大学は創立110周年になりました。1900年に「芸術による女性の自立」を建学の精神の第一に掲げ「美術大学」としての日本で唯一の女子大として、歴史と実績を受け継いでまいりました。そして、優れた作家、デザイナー、教育者、研究者などを国内、国際社会に数多く送り出してきました。

21世紀の女子美の新しい芸術の世界は、大学全体と、学生全員が一つになって作り上げていく世界です。多様化した芸術の分野に挑戦し、しっかりと取り組んでまいります。先生方は、みなさんそれぞれが知性と感性を生かし、個性を磨いていけるよう熱心に指導してくださる心強い先輩者です。

温かく助言してくれる先輩もたくさんいます。

大学生活で、自分だけができる立派な作品を努力して必ず仕上げてください。そして在学中に、いい友、生涯の友を見つけてください。



大学院美術研究科長  
橋本 信  
(はしもと まこと)



芸術学部長  
小倉 文子  
(おぐら ふみこ)



短期大学部部长  
小川 正明  
(おがわ まさあき)

## Message ● 2 2010年度 新任専任教員紹介



### 河邑 厚徳

Kawamura Atsunori

芸術学部 アート・デザイン表現学科 メディア表現領域 教授

1948年生まれ。映像ジャーナリスト。  
東京大学法学部卒業後 NHK でドキュメンタリー制作を続ける。  
一貫して目に見えない精神世界、理論物理学、神話等の映像化にチャレンジ。  
内外の映像祭での受賞多数。  
「シルクロード」「アインシュタインロマン」(NHK・DVD)「日本その心とかたち」  
「チベット死者の書」「ふるさとの伝承」(スタジオジブリ・DVD)

大学生活を人生の礎としよう。そういう私は学生運動と混沌と愛を追求した。現代はメディアを核に同心円のように広がり変容している。テクノロジーは人の感覚世界を変え、アートとメディアは表裏一体で切り離せない。大学時代にメディアの確かな海図を手に入れよう。現代は、携帯・PC・アニメ・CM・テレビ映像などで覆われている。その中でメディアの情報と映像に埋没せず、主体的に自己の表現手段としてメディアを捉えよう。



### なかや みわ

Nakaya Miwa

芸術学部 アート・デザイン表現学科 ヒーリング表現領域 准教授

1992年女子美術短期大学造形科グラフィックデザイン教室卒業後、株式会社サンリオに入社。退職後、1997年、福音館書店より「そらめくんのベッド」で絵本作家デビュー。作品に、「そらめくん」シリーズ(福音館・小学館)、「くれよんのくるくん」シリーズ(童心社)、「こぐまのくうびい」シリーズ(ミキハウス)など、多数ある。

新学科ヒーリング表現領域で、実技指導の授業を担当させていただくことになりました。私の専門は絵本とキャラクターです。本職は絵本作家です。好きなことを仕事にするのに必要なのは、絵のうまさやセンスの良さではありません。覚悟と強い意志、そして仕事を心から楽しむことです。そういった生の経験を女子美生にたくさん伝えていきたいと思っています。社会に出たら、シビリアな現実が待っています。女子美生には、それに立ち向かえる強いクリエイターに育ててほしいです。あなたにとっての一生の仕事をみつけてほしいと切に願います。



### 弘中 雅子

Hironaka Masako

短期大学部 造形学科 美術コース(絵画) 准教授

熊本県生まれ  
1972年女子美術短期大学造形科絵画教室卒業1973年同専攻科修了 同研究生  
1976年第53回~第87回春陽展出品 第73・77・78回春陽展奨励賞受賞  
第83回春陽展損保ジャパン美術財団奨励賞受賞  
個展2003年 G-ART ギャラリー、2006・2008年ギャラリー山口、グループ展、茅の会展、他。著書「かまぼこ板でつくる」春陽会会員

かつて茅ヶ崎にあった、女子美短大絵画専攻科茅ヶ崎校舎。緑に囲まれた広いアトリエでの日々は、たくさんの出会いと大切な思い出の詰まった時間でした。そして私の創作の原点です。

今、様々な素材を使って新たな表現の可能性を模索しながら制作に取り組んでいます。若い柔軟な好奇心と制作意欲を持った皆さんとの出会いを楽しみに、そして共に学んでいきたいと思っています。



### 壺谷 吉也

Mokutani Yoshinari

短期大学部 造形学科 デザインコース(情報デザイン) 准教授

1962年静岡県生まれ  
武蔵野美術短期大学専攻科商業デザイン専攻修了  
(株)日本デザインセンターを経て、モクタニデザイン設立  
日経広告賞流通部門賞、全日本 DM 大賞金賞、  
ニューヨーク ADC Distinctive Merit、他  
東京タイプディレクターズクラブ会員

紙媒体を中心に、広告・セールスプロモーションの制作にアート・ディレクターとして携わってきました。

専門領域はコミュニケーションであると捉えています。

デザイン教育を美醜という概念に基礎を置くのではなく、あるコミュニケーションの原理に従い、正しいか間違っているかということに基礎を置きながら、その先の創造性を育んでいきたいと考えます。

## Message ● 3 退職教員からのメッセージ



**稲田 美乃里**

Inada Minori

芸術学部 絵画学科 洋画専攻 教授

十代の頃 成人式の振袖より 嫁入り仕度より 大学で学ぶこと 留学することの方が良かった。  
大学に入ってから今日まで 好奇心を充足させる日々で満足。  
大学に残り 芸術を学ぶ 多感な女性の成長ぶりを見守る楽しい日々。  
卒業した学生達は どうしているだろうか。女子美での学生生活が最良の時間であったにちがいない。  
私も女子美を去る時がきました。  
長靴はいて庭仕事。自転車こいで多摩をツーリング。物であふれた部屋の大整理。読めなかった新聞と本の山の読破。  
皆様 お元気で。ADIEU!!



**仙石 克己**

Sengoku Katsumi

芸術学部 芸術学科 教授

4月恒例の研究室連絡会。当時私が所属する造形理論研究室は色彩・図学・デザイン・写真・工芸の共通科目を全学生対象に開設。専門別の多くの教員が担当していました。会は食事をしながらのカリキュラム連絡と親睦で、人気会場 NO.1 は新橋の酒蔵会館登茂恵。松島学長（故）・雨宮・大井・川崎・小泉（故）・福田他の先生方に職員の武藤・早坂・津森氏ら。毎回欠席者ゼロで、会たけなわは特設のカラオケ。学長の「港町十三番地」熱唱や蟹の甲羅に棒を刺し、これをパートナーに美しく舞う菊池教務部長（故）等今や良き思い出です。女子美バンザイ。



**佐々木 宏子**

Sasaki Hiroko

短期大学部 造形学科 美術コース 教授

常に、私自身の制作活動を通して得た素晴らしいものを学生に伝えるのが仕事だと思ってきました。現代美術における「基本と精神」の重要性を現代造形の4年間で示したことは、美術大学の、日本の美術界の、世界の美術界の現代美術に対しての大きな心を持ってのこと、今は一粒の小さな種が芽を出し、育ち始めていることを感じています。美術の「基本と精神」を女子美の学生にも、もちろん、学生と同様に私もこれからずっと追究し続けます。



**清水 明子**

Shimizu Akiko

芸術学部 工芸学科 教授

私は付属中学から女子美で学び、50年余りを女子美に育てられてまいりました。この度、新学科のスタートを前に、後進に後を託し退職を決意いたしました。技術に根ざした伝統ある女子美工芸の教育は、杉並から相模原へと引き継がれ、時代を担う若い芽が確実に育っております。新しいデザイン・工芸学科ではこの若い芽を大切に育て、さらに多様化するであろう学生のニーズに応える柔軟な教育で、創造力豊かな創作活動に期待いたします。在職中のご厚情に感謝申し上げますと共に、心よりお礼申し上げます。

Interview ● 1

## 女子美術大学付属高等学校・中学校 学校長 継岡 リツ氏 インタビュー



現在、女子美術大学付属高等学校・中学校の学校長を務める継岡リツさんは、付属高校から大学まで女子美術大学の出身です。卒業後は同級生とグループ展を20年も継続して開催したり、イタリアのミラノで学んでくるなど、今でも作家活動を精力的に続けています。学生時代は、いろいろな苦労も含めてすべてが楽しかったという継岡学校長に思い出の数々を語っていただきました。

### よく遊びよく学んだ学生時代

私が女子美術大学の付属高校を選んだのは、おそらく趣味の幅が広がって少し変わっていた父親の影響が大きかったと思います。私は末っ子だったし、戦後だったから、姉たちと違って好きにさせようみたいなところもあったのでしょ。でも、その頃は鶴見に住んでいたの、家からバスで駅まで行き、品川を経由して新宿で都電に乗り換えて毎日通うのはけっこう大変でした。

当時は付属も大学へ進学するための推薦制度がなかったので、みんなデッサンを描いて頑張っていました。大学在学中は60年安保闘争もあって世の中が大変な時期でしたが、私の場合は高校の卒業と同時に父が倒れたため、今でいうところの介護をしながらの通学でしたから、学生運動どころではありませんでした。

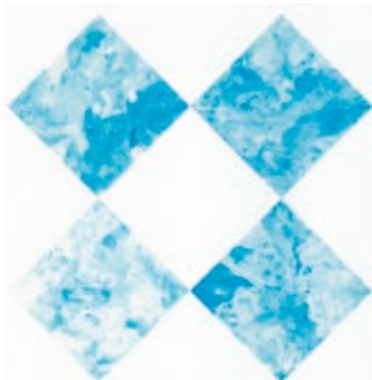
洋画科では、付属からいった気の合った友だちや大学で仲良くなった仲間といつも十数人かたまって授業を受けていました。おもしろい人たちがけっこう自然に集っていたので、よく一緒に新宿の武蔵野館や、フィルムセンターに映画を見に行きました。

コクトーの「オルフェ」とか「情婦マノン」など、当時はモノクロ映画全盛の時代でした。高校でも大学でもいろんなことがありましたが、今振り返ってみるとすべてが楽しかったように思います。それは、今の高校生たちに聞いてみてもやはり女子美は楽しいと同じ答えが返ってきます。

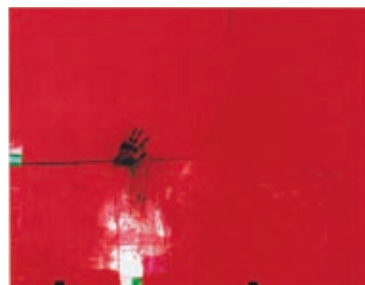
### ミラノに行って戻った色彩感覚

女子美を卒業してからは、助手として研究室に残り11年半、在籍しました。退職してからは子育てもしました。でも、絵だけはずっと続けていたんです。学生の頃は森芳雄さんという画家が好きだったから、私も似たような画風の絵を描いていましたね。それで平成になったときに、研究室から紹介されて高崎の私立の美術系の学校へ教えに行くことになりました。そこも遠いところでしたので、何か遠いところへ行くのが私の運命なのかなと思いました。

その学校が終わってから、文化庁の特別派遣で3ヶ月ほど海外研修する機会に恵まれ、私はミラノに行くことに決めました。N.Y.、パリ、韓国にも行ったことはありますが、結局ミラノのファッションの持つ色彩感覚にひかれてミラノにしたのです。大学入試で色弱の疑いがあると言われて以来、色を使うことにトラウマがあったのですが、ミラノで色彩豊かな生活を目にして自分の中で何かが吹切れたような気がしました。向こうではブレラという大学へ入りました。そこは、建物がマリア・テレジアで知られるハプスブルグ家の頃のもので、天井に当時の絵が描かれているような伝統のある大学でした。そこでの授業は、教室も狭く、描く場所を確保するのに学生たちは必死でした。設備などを比較すると日本の美術学校の方がすごく広くてきれいです。日本はとも恵まれていると思いました。



第55回記念立軌展(2003) たまゆらの



第48回立軌展(1996) 創世期 I

### 大切なのは継続する力を持つこと

私は今、女流画家協会と立軌会という2つの美術の会に所属しています。年2回は必ず展覧会に作品を出さなければいけないわけです。ある意味、こうした会に所属して出展しながらやってきたのがよかったと思っています。でも何よりも、私が続けてこられたのは、同じ仲間が存在が大きかったと思います。若い時は、個展をやりましょうといっても、一人ではすぐにはなかなか決心がつかないものです。お金もかかるわけですから。私は、学生時代の仲間たちと一緒に20年近くグループ展を続けました。とにかく自然消滅はやめようということで、まずは10年、そしてその後も続けてきたのです。その継続の中で各々の方向性が見えてきた時に解散しました。女性が描き続けていくには、やはり友だちの影響も大きいと思います。制作を続けることは卒業してからのスタート。だから友だちがいて、各々いろいろな職業を持っていても年に1回は集まって発表しようというのがあればいいと思います。やはり続けることが大事。続けてこだわっているから、新しい発見があるのだと思います。良き友だちや先輩に出会うことにより、憧れとか目標ができて描き続けていけるのです。その点、女子美の人たちは恵まれていると思います。今も付属の同じクラスの仲間とはずっと仲がよくて、クラス会をやるとみんなすぐ集るほど強い結束力があります。

絵画でも彫刻でも素材が違うだけで、どんな分野でも表現するという意味では同じことです。たとえば、岡田嘉子さんをはじめ、奈良岡朋子さん、桃井かおりさん、賀来千香子さんなど、女子美から多くの女優さんが出ていることでもわかります。女優という職業もまさに表現する仕事ですから、どんな道を選んでも表現者として女子美生のパワーでがんばってほしいと思います。

OGインタビュー  
デザイナー 矢野りんさん

本学の卒業生でデザイナーとして活躍中の矢野りんさん。3年生のときの学園祭をきっかけにコミュニケーション・ツールとしてのWebデザインの可能性に気づいたそうです。今でこそ当たり前のように使っているインターネットですが、普及した当時は一からすべて立ち上げなければならぬ状況だったと言います。当初のエピソードなどを伺ってみました。

## 学園祭でWebページをつくらう

学生時代は、内山博子先生（現メディア表現領域教授）のゼミでコンピュータ・グラフィックやインタラクティブ・メディアなどの勉強をしていました。私がインターネットと最初に接したのは、まだインターネットが動き出したばかりの頃でした。内山先生が学園祭で大手商社の方と一緒に、学内の出し物としてインターネットを引いてしまおうということになったんです。そのときにしたらかなり無茶な話でしたが、いかにも先生らしい発想だと思いました。

それで、誰かWebページをつくることのできるかと言われて、「軽くできますよ」みたいなことを言ってしまったのがこの始まり。3年生のときに、学園祭の3日間に部屋に回線を引いてネットカフェをオープンするという企画と、もう一つは学園祭の様子取材してWebで配信するという二本立てでやりました。当時、ちょうど学園祭にゲストで来られた美輪明宏さんにいきなり取材して、コメントを記事にして写真と一緒に配信するといった一連の作業をけっこうまじめにやったんです。そのときのチームは、総勢10人くらいで動いていたと思います。

## ネットって誰か見ているんだ!

初めてWebをやってみて、技術的にはhtmlをいじるだけだったので簡単なという感じがしました。何よりも良かったのは、取材してコンテンツを作って他人に発信した結果、すぐに外部から反応があったことです。友だちから「見たよ」みたいなメールが来ちゃったので調子に乗ったんです。「へえー、すごいなネットって。誰か見ているんだ」というのが第一印象だったでしょうか。パソコンはそれまでゼミで使っていたけど、孤立していて、どこかにつながっている感覚もない状態でした。それが外からいきなりレスポンスがあるというのがまず驚きでしたね。

もともと子どもの頃から、壁新聞をつくったりとか放送局をやったりするなど、発信することは好きだったので、その延長みたいなノリはありました。あと、学生の頃はサイバーパンクみたいな小説がすごく好きでした。それこそブレッドランナーの話とか、あと、ウィリアム・ギブソンの書いた『ニューロマンサー』みたいな、プログラマーがバーチャルな世界で冒険するような話がめちゃくちゃかっこいいと思っていました。プログラマーってなんてかっこいい生き物なんだと勝手に幻想を描いていたのでテクノロジーの側にいたいという気持ちは常にありましたね。

## 道のないところに道をつかった

当時は、学内でもPCで芸術をやること自体何の意味があるんだというような時代でしたけど、美術大学を出てhtmlがかけるとかWebのことがわかる人が少なかったため、それでなし崩し的にその分野に進むようになりました。学園祭のことがきっかけで、4年生になってからは内山先生と知り合いの商社の人たちのところでアルバイトをしていました。そこのつながりで、事業会社のプロバイダーに契約という形で入ることになって、卒業してかれこれ4年ぐらいそこで働きました。1つ年下の仲間たちと一緒にやっていましたけど、ゼロから立ち上がったプロバイダーだったので、最初からデザイナーがいるわけでもなく見習うものもないから、自分たちで工夫してやるしかありませんでした。全然道のないところに道をつくるというようなところがかなりありましたから、とにかくもうひた

すらがむしゃらに現場で対処するしかない状況でした。最後はやったもん勝ち。目的にさえかなえばいいじゃないと、なかば開き直りもあったかもしれません。ほかには、フリーとしても仕事を入れたり、専門学校や女子美でも教えたことがあります。そういうツールを使って絵を描いたり、Webをつくるということ教える機会があったので、それも仕事としていたわけです。

Webの基礎知識にもいろいろ種類がありますが、知らないと困ることはhtmlとかcssの2種類の共通の基盤のことぐらいかな。この2種類については基本中の基本なので、Webページというものがある以上最低限知っておく必要があると思いますが、本当にそれぐらいです。あとはグラフィックの知識とか、色彩学に対する基礎的な知識とか、むしろそっちのほうが強みになると思います。今のところ、圧倒的に美術大学を出た人が足りないのですね。いろいろありますよ。

## 自分の主観を分かち合える友だちをつくる

一般の社交性から比べると美大の人は閉じている人が多いと言われるけれど、私はある程度の時期までは閉じていて全然かまわないと思っています。自分の世界の中の内側を広げていく作業はおもしろいものです。いろんな本を読んだり、映画を見たり、自分の好きなものばかり取り入れて生きるのには本当にすごいことだと思っています。それができなくて、周りに合わせてばかりいるような、若いうちからそんなことばかりしている人は私の友だちにはあまりいません。

自分を閉じるだけでなく開いていくときももちろん必要です。私の場合、すごい人が現われたときですね。この人すごいなと思える人がいるとやはりおもしろくなります。去年ぐらいにやはり大きな出会いがありました。今、NPO法人になっている組織で、「日本Androidの会」という名前の会があります。AndroidというのはGoogleが最初に作ってオープンソース化したOSみたいなものです。スマートフォンとか機械に入れるOSみたいなものがあるんですが、Androidというのはその上で動くものを作っている人たちの集まりです。とりあえず、みんな好きなことをしている。アプリケーションを作っている人もいれば、組み込み機械、例えば冷蔵庫やステレオのよう

なものにそのしぐみを入れて、情報をその都度ネットでやりとりするようなハードウェアを作っている人もいます。

職業でも趣味でもいい、自分の職場にそういうものを作りたいというピュアな気持ちを持てる人がいるかという、普通はあまりないんですが、日本 Android の会の場合はただただ作りたいというような、そういう物狂おしさを抱えた人たちが集ってきているのが素晴らしい。技術情報を交換したりだとか、「こんなことやったよ」と自慢しあうわけです。けっこうなオタクですけどね。

## Webデザイナーとしてのスキル

ITの世界において「作品」とは、とにかく動作しなければ存在価値が認められないという厳しさがあります。もっと言うと、アプリケーション・ツールとして使えるようであればならない、何らかの用途がある、ということが重要です。そこに達するように作るとなると、美しいかどうかは二の次。とにかく、成果物が世の中に出る前の段階で動くかどうかということは、非常に重要な問題なんです。そこで動けば世に出るわけですが、世に出たあとはまた美しくないと受け入れられないという、二つの段階があるのでそこがまた難しい。審美的な追求の度合いが、作り手側の内部の都合で終わってしまうこともけっこうよくある話なんです。「動いた！いいじゃん。出しちゃえ、あれ？」みたいなこともある。でも、この「あれ？」というのに、ここ数年気づいてきている人がかなり増えてきました。では、誰がきれいに化粧してくれるのと言ったときに、それはやはりデザイン

なり美術なりを勉強してきた人ということになります。そこで、求められるのは審美眼なのです。

以前はプログラミングとグラフィックデザインという作業が一体化されていて、両方できないと駄目だという時代がありましたが、今は開発担当とグラフィック担当というように、役割分担したうえで制作が進められるという制作技術の向上が一つ背景として挙げられます。あと、開発を担当しているプログラマーにもいろいろな人がいて、昔のようにただ動けばいいという人もまだいますが、やはりかっこよくないと納得できないというプログラマーも、最近若い人の中でかなり出てきました。そういう発想の人と一緒に仕事を組むことができれば、美術系の存在価値も十分あるわけです。だから、私は一貫してデザイナーを名乗っています。特に昨年ぐらいからは、意識してグラフィックのほうをきちんと担当できるように、どちらかと言うと絵を描く方のスキルを上げていこうという意識でいます。

私は、今のところ組織は作っていませんが、一応ローマ字で「rockrin」という屋号を持っていて、それを名乗るときは開発担当の人が一緒にやっています。屋号はチームで活動するときの名前で、私がグラフィック担当ということになっています。

## 本もいろいろ出してみた

Webの仕事をする一方で、私にとっては本を書くこともライフワークとして重要な位置付けにあります。そもそも、98年頃にある出版社のデザイン部門から記事を書く仕事をいただいたことがありました。そのつながりから『Webデザインの教科

書』という書籍を出したのが最初です。その当時、デザイナーでもわかる言葉で、htmlなどの内容を入れつつ、コンパクトに必要な知識をまとめた本がなかったので、それをやってみよう、できるかもしれない、ということでやったわけですが、ほかに競合するコンペティターがいなかったのも、その本はけっこう売れました。必要にかられた状態で原稿を書いてみた結果、本が出せたということから、周りからも私が出せる人と思われるようになって、それ以来いくつか出版の依頼がくるようになりました。

2009年末までは書籍を年に2冊ぐらい発行できるペースでやっていたんですが、今年はデザイン制作のほうに比重を置きたいなと思っています。それは、去年1年間仕込み続けてきた新しい自分の居場所が機能しそうなので、その場所で仕事ができるように仕向けていきたいと思っているからです。具体的には、スマートフォンで何か動くものを作りたいと思っています。それは、何かサービスなのかもしれないし、アプリケーションなのかもしれませんが、今のところなかなか切り分けは難しいところです。

## 秋葉原のイベントが成功する

Androidの会で女子を集めてみようという、メーリングリストに誰か興味ある人いますかって話しかけたらけっこう反応があったので、その勢いで秋葉原でイベントをやりました。女の子だったらこんなスマートフォンがほしいとか、こういうアプリケーションがほしいという話をしたりしました。今、スマートフォンのアプリケーションは見かけがあまりよくなくて、ただ動けばいいという感じで作っているのがけっこうあるので、もう少し使う楽しさを追求するデザインにしてみようということで、会に所属する女性開発者とアプリケーションを作って技術的な解説もするというのをやったんです。すると、普通だとIT業界のイベントに来るのは男性ばかりなんですが、そのときは80人来てくれた中の半分が女性だったので大成功でした。

理系の男性ということ、けっこうロジカルに必要最低限のパフォーマンスで目的を達成して効率化を目指す人が多いので、男性だけでかたまっていると楽しそうに見えないという面があります。でもそういう人たちと私たち女性がタッグを組むとけっこういいものができると思います。それでだんだん男の子と女子が仲良くなってもらって、みんなで雰囲気を変えていけばいい。いま



(左から) 「デザインのへそ」/エムディエヌコーポレーション、「Webデザインメソッド」/ワークスコーポレーション 「デザインする技術」/エムディエヌコーポレーション 「Webレイアウトの「解法」」/エムディエヌコーポレーション

# Interview

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

で関係ない生き物みたいに行動していたのが一緒に和気あいあいと話すと、価値観も交換していけるんじゃないか。なんか日本の社会にとってすごく重要なことのように直感的に思います。

## まずは行動力、頼まれる前につくる

私の仕事に大きく影響を与えたのは、やはりゼミの内山先生の存在だったと思います。内山先生はかなり開いた方で、新しいことに食らいついていけみたいな。先生自身に言葉で教育されたというのは記憶にないんですが、何でもやってみようとするチャレンジ精神旺盛な人でした。私の学生時代にパソコン何十台を導入したりとか、周りの人を圧倒するような行動力を持っている人だと先生の背中を見て感じていました。だから、私もとにかく行動しないと駄目だとすごく感じました。先生からは、いろいろな公募にも積極的に出品しなさいと言われてました。そのお陰で、CGアーツ協

会主催の学生CGコンテストのインタラクティブ部門で優秀賞などの賞をいただいたりもしました。

行動を起こすということは、仕事面でも生かされています。注文を受けてから作るのではなく、発注を受ける前にやるということが大事だということです。私の場合は、とにかく先に動くものを作ってしまう。逆にそうしないとその先の道が見えてこないからです。ITの世界は特にそうなんです。アイデアレベルではみんなすごい発想を持っているんです。こういうことしたらおもしろいというのを言いやすい業界なんです。ただ、「じゃ作ってよ」と言われたときに、すでにできている状態にしておかないと話が進まないのかなと思います。

## やりたがり屋が出てくる時代到来

宇宙物理とか機械系とか、物事の根幹のことをやっている人たちが多いのがテクノロジー関連業界の特徴です。どちらかとい

うと、狭いところを掘り下げている人たちの集まりです。プログラムは専門ではありませんと言いつつも、やればできるだけ体力がある。何よりもやりたいことがはっきりしている人の多い場所です。

最近、様々なジャンルの業界において、そういう時代になってきたように思っています。難しいこととか、大変なことは昔ほどなくなってきています。むしろやりたいことと、やりたいことができたという間にある手続きがどんどん簡略化されてきているので、何がやりたいのか考える間もなく、やろうと思ったとき、やれるんです。だとすると、例えば、美術の世界で彫刻を極めたとかデッサンを極めたと言えるような人のほうが、何かしたい、作りたいという純粋な衝動の強さがあるから何でもできるような気がします。実際、技術面で補完してくれる人はたくさんいるし、聞けば教えてくれる。あとはこれが見たい、こういうものが作りたいという気持ちさえあればいいわけですから。でも、肝心な気持ちを持つことが実は一番難しいのです。気持ちがない人にそれを後づけで付けるのは無理な話。努力でもお金でも買えないものなのです。私は女子美を卒業して本当に良かったと思っています。女子美のキャンパスにはその気持ちがある。やりたい、やりたい、みんなやりたがり屋ばかりだからいいんです。



(左)画面に触れると触れたところがキラキラと輝き出します。  
(右)画面上のキーが板チョコのようにになっているバレンタインバージョン。

## 矢野りん (やのりん)

1996年、女子美術大学芸術学部芸術学科卒業。いろいろな講義活動を通してサイトデザインのトレーニングをするかたわら執筆活動も行う。主な著書に「デザインのへそ」『Webレイアウトの「解法」』(以上、エムディエヌコーポレーション)、『WEBデザインメソッド』(ワークスコーポレーション)などがある。「日本Androidの会」会員。

## NEWS ● ① 阿久比町の刺繍水引幕の修復をしました

知多半島には江戸中期から伝わる山車が今でも祭礼に使用されています。このたび短期大学部の刺繍研究室では岡田宣世教授を中心に、愛知県知多郡阿久比町宮津南社山車保存会所蔵の刺繍水引幕の修復作業をおこないました。この阿久比町の刺繍水引幕は、天保4年(1833)に名古屋伊藤(現松坂屋)で制作された記録があり、黒羅紗に金糸刺繍の龍を立体的に綴じ付けた3枚一組の幕でした。金糸留めの絹糸の劣化で金糸が外れたことから、幕全体を解体して、

全ての金糸を留め直し、損傷を受けた目や牙・爪などの金属と金欄は新たに復元して、

取り換えました。今年の祭礼は4月17日・18日で、山車2台が引き回されます。





## 東京五美術大学連合卒業・修了制作展 南畠宏教授講演会「芸術の根拠—アウシュヴィッツ、以後」

2010年2月19日、国立新美術館において「平成21年度第33回東京五美術大学連合卒業・修了制作展」が開催され、本学の南畠宏教授による基調講演がありました。「芸術の根拠—アウシュヴィッツ、以後」と題し、アートの根源的な存在理由を問う、深く熱いメッセージが語られました。

今回のテーマは「芸術の根拠—アウシュヴィッツ、以後」というものです。かつて、フランスの哲学者ジャック・デリダは「アウシュヴィッツは交換不可能だが、メタファーの場であり続ける」と、あらゆる表現を考えるための存在だと言いました。人間がこれほどまでに悪魔になれるという事実を、神に突きつけるかのようなアウシュヴィッツですが、事あるごとに立ち返ってきた私自身のアウシュヴィッツ体験は、「芸術の根拠」というものを根源的に考えさせる場所であり続けてきました。アウシュヴィッツというメタファーをふまえた上で、芸術というものの根拠を見誤らないために、私自身のアウシュヴィッツへ、そして、アウシュヴィッツから、という遍歴の一端をお話させていただこうと思います。

話は今から20年前に遡ります。私は広島市現代美術館を立ち上げるために、約3年間、ヒロシマという場所で、芸術の可能性というものを考える時間を与えられました。毎日毎日、原爆ドームの前を通過して、十数万ともいわれる人間が一瞬の内に消え去るといふ、説明不可能な事実を前に、ヴィトゲンシュタインではありませんが、沈黙しなければならぬ真実に対し、芸術は本当に可能なのかという残酷な問い、そして、世界には表現し得ぬものがあるという、ひとつの結論を突きつけられることになりました。

このヒロシマでの経験がなければ、おそらく私がアウシュヴィッツに導かれることはなかったでしょう。カルティエ工現代美術財団の奨学金を得て、パリへの留学を機に、私は初めてアウシュヴィッツに立つことに



なります。確かにそこは恐怖の場所でありました。ところが私はここで不思議な感慨に襲われたのです。つまり、残酷な死の場所でありながら、どこか故郷に帰ってきたかのような、誤解を恐れずにいうならば、喜びにも似た帰郷感を味わうことになったのです。それは死の質感を知ることなく、生の実感、生の根拠を手にする事ができないという経験でもありました。そして、以後、旧社会主義国の現代美術のリサーチを続ける中で、今日まで7回、アウシュヴィッツを訪れることになりましたが、その感慨は変わることなく、ますますその帰郷感を深めつつあるのです。

そして、私は5つ目の美術館となる、熊本市現代美術館の開館準備をする中で、小さな一体の「人形」と出会い、改めてその実感を蘇らすこととなります。その人形は熊本の合志市にあるハンセン病の国立療養所、「菊池恵楓園」に暮らす一人の女性が、産むことを許されなかったわが子の身代りとして、大切に抱きしめてきた「太郎」という名の抱き人形でした。



「太郎」

ハンセン病は今では完全に治療できる病ですが、誤った情報に支配され、患者さんたちは不当な隔離と差別の中、子どもを持つという、人間の根源的な権利を国家から奪われ続けてきました。しかし、この世にこんなに愛らしい人形が存在するのかと言いたくなるような「太郎」を知ったとき、世界を回って最先端のアートを調査してきた私自身が、まず知らなければならなかったことが、他ならぬ私の足元にあった。彼女たちが絶対的な孤独と差別に耐えてきた、その真実の生の重さこそ、美術館なる芸術の場所において、光を当てなければならぬと思ったのです。

この出会いを契機に、それからの5年間、私は全国すべてのハンセン病の療養所、そして台湾、韓国の療養所を巡礼のように訪ね歩き、そこを生き抜いてきた方々の生活



や、そこで描かれた絵画などの存在を知りました。それは崇高なる芸術作品の数々でした。そして、2007年に開催した「ATTITUDE 2007」という国際美術展においても、その成果を表すことになったのですが、この巡礼は、いわば死の場所に立たなければ知り得なかった、人間の根源的な表現の真実によって、私たち自身の感覚を蘇生、修正する経験として、再び、ヒロシマ、アウシュヴィッツでの経験と重なることになっていったのです。

ハンセン病の歴史における人間の真実も、ヒロシマも、アウシュヴィッツもすべてが沈黙の中にあります。しかし、私はその沈黙の富に触れたときの、不意なる、そして、強烈な生の実感を問い続けなければならないと思うのです。

アウシュヴィッツでの体験を記した『夜と霧』の中で、ヴィクトール・フランクルは、別々に収容された妻がまだ生きていると思い、その生が想念において妻と会話する無上の喜びによって支えられていたと書いています。彼の生をつなぎとめていたその感覚。私はそこにこそ、芸術の根拠の質感を覚えるのです。フランクルは、壮絶な体験をしたにもかかわらず、否、したからこそ「それでもイエスと言おう」と言えたのではなかったでしょうか。この悪魔的なアウシュヴィッツですら肯定するかのような、この決意に対し、私たちは何を差し出すことができるのか。この終わることのない問いかけは、芸術に関わる私自身の重いテーマであり続けているのです。

### 南畠宏 (みなみしまひろし)

筑波大学芸術専門学群芸術学専攻卒。熊本市現代美術館館長、国際美術評論家連盟理事、全国美術館会議理事などを歴任。ブラハ国際現代美術トリエンナーレ2008国際キュレーターを務める。また、2009年には第53回ヴェネチア・ビエンナーレ2009日本館コミッショナーを務める。2009年「西洋美術振興財団学術賞」受賞。主な著書に評論集「豚と福音」などがある。

## Graduation ● ● ● 女子美スタイル☆最前線 2009



2月10日から14日、「女子美スタイル☆最前線」が横浜のBank ART Studio NYKで開催されました。本展覧会は、芸術学部、短期大学部、大学院の卒業・修了制作作品の中から選抜された作品が展示されるものです。「芸術・女性・社会」というグランド・テーマに基づき、作品を平面や立体というようなアートフォーム（表現の形態）によってではなく、作品に潜在するテーマに沿って分類され、展示されました。展覧会全体のコンセプトを「大きなリアル、小さなリアル」と設定し、全3フロアの会場は「記憶の中にあるリアル」（1F）、「いまそこにあるリアル」（2F）、「生み出されるリアル」（3F）という3つの視点から構成されました。

### オープニングパーティ



展覧会初日の2月10日にはオープニングパーティが行われ、女子美生が主催するパフォーマンス集団「JOY」によるパフォーマンスや、7名の選者から7名の学生に贈られる「JOSHIBI rainbow award」と題した賞が発表され、授与式が行われました。

### Indigo Prize：佐野めい氏（本学学長）

受賞者：込戸かんな（大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域）

#### 「山水画」

（作品写真は11ページ参照）

佐野：私はとても敵わないと思いました。若ければできるかと思えば、そういうことでもない。腕が動かなくなるくらい、大きな木を彫り続けて、その彫ったものから拓をとった作品です。本当に感動しました。

### Violet Prize：大村智氏（葦崎大村美術館

### 館長、本学理事長）

受賞者：中村 萌（芸術学部絵画学科洋画専攻）



#### 「germ」

大村：私が選んだ作品は、実は他の選者の方とバッティングしたのです。でもとにかく私はこの作品が気に入ったので、私の賞とさせていただきます。

郷愁と童心を覚えます。彫りすぎていないところがまた良いです。

### Blue Prize：杉田敦氏（本学教授）

受賞者：小室藍子（芸術学部絵画学科洋画専攻）

（作品写真は11ページ参照）

#### 「対話」「When you wish upon a star」

杉田：全体を観て、最後に印象に残るのは彼女の作品でした。展示作業中に作品を移動してもらうなど状況の悪いこともありましたが、きちんとその時々で対応してくれました。どうしたら作品がもっとよく見えるのかを常に考えてくれて、いいなと思いました。

### Orange Prize：木村絵理子氏（横浜美術館学芸員）

受賞者：広井彩香（芸術学部デザイン学科）



#### 「穴」

木村：『女子』だなと思いました。ピンホールカメラで撮った『穴』っぽく写った写真を並べています。作品全体も『穴』の形をしている。お菓子の袋でつくったピンホー

ルカメラが付け足しのように置いてあるのが、自分が食べた今までの男性を捨ててあるようにも思えて面白かったです。

### Green Prize：押金純士氏（『デザインの現場』編集長）

受賞者：長尾萌子（短期大学部造形学科）  
（作品写真は11ページ参照）

#### 「名刺」

押金：本当に単純に好きな人、思い浮かんだ人の「名刺」をたくさんつくっていて面白いと思いました。「自分の手で描く」という小さい単位のことを作品にして表現して見せてくれていること、また、発想のセンスが面白いと思い、この作品を選びました。

### Yellow Prize：永井龍之介氏（永井画廊代表取締役）

受賞者：戸田沙也加（芸術学部絵画学科洋画専攻）

（作品写真は13ページ参照）

#### 「Style」少女群像図「窓」少女群像図「劇場」

永井：本当に絵を描くのが好きな人なんだと思いました。私は、絵を描くという原点をしっかりと描写されている人を選びたいと思いました。この作品は表情の描き方一点、大変丹念に描かれています。少女群像図に純粋な気持ちが込められていて、好感が持てました。

### Red Prize：小崎哲哉氏（ART iT 編集長）

受賞者：水野久美子（芸術学部デザイン学科）



#### 「点の調べ」

小崎：太宰治の文庫本の句読点が作り出しているリズムを、ある法則に基づいて音に置き換えている。メディアアートですね。メディアアートというのは比較的歴史の浅いジャンルですが、着眼点がいいし、面白い展開が期待できるんじゃないかと思いました。

## 杉田敦教授×竹内万里子氏 ギャラリートーク報告



2月10日～14日まで横浜のBankART StudioNYKで開催された『女子美スタイル☆最前線2009』。13日には本学教授で美術批評家の杉田敦教授と京都造形芸術大学准教授で写真批評家としても知られる竹内万里子氏によるギャラリートークが行われました。

### 小室藍子「対話」

『When you wish upon a star』



杉田：Blue Prize（ブルー・プライズ）に選ばれた小室さんは、作品自体もそうですが、自分で赤帽のトラックで作品を持ち込むなど、一生懸命やっている姿も、展覧会にのぞむ態度という意味では大きくプラスに働きました。選考の第一の理由は、搬入をしていた2日間、家に帰ってもこの絵柄が頭から離れなかったということです。理屈ではなく、今年の子美スタイルといふこの絵がイメージされたのです。技術的にはたいしたことなくても、それでも、ちょっとしたことで人の心を動かすことができます。そんな作品があるんだと思われました。

竹内：私はペインティングの専門家ではありませんが、この絵はぼんやりとした感じの作品とはいえ強い印象を受けました。展示方法がよかったと思います。かなり大胆ではありますが、二つの絵がそうあることによって、見る人の視線がゆるやかにその間を流れていくような配置になったと思います。大きな作品ですが、それを前にしたときに、思わず立ち止まらせるようなのっぴきならない力強さを感じました。描くという行為にあたっては、どれだけうまく描

けるか、人より目立たせることができるか、というような欲望を誰もが少なからず持っていると思います。でもこの絵はそれだけではない印象があります。手段が自己目的化してなくて、その先が確実にあるように思いました。

杉田：すごく高い所に展示してあるのもいいですね。写真の展示の場合は、ヴォルフガング・ティルマンスという作家のように、目の高さに作品を展示するのではなく、ランダムに配置するということが、かなり一般的になってきていますよね。

竹内：絵画と比べると、確かに写真はいつでもどこでも姿や場所を選ばない変幻自在なメディアですし、それゆえにいかがわしいとも言えますが、そこが魅力でもあるわけですね。その一方で、芸術の伝統的な見せ方やジャンル分けについて改めて検討するにあたって、こうした写真の可変性から得るものは大きいかもしれません。展示の方法によって“見る”という行為そのものを問いかけることもできるわけですね。だからといって、ただぐちゃぐちゃにすればいいというわけではありません。上下の構造をあえて破壊して置いてみたときにどうなるのか、それによってイメージとイメージの間になにか起きるのか、そうしたことを丁寧に考えいく必要があると思うんですね。

### 込戸かな「山水画」



杉田：次の作品はIndigo Prize（インディゴ・プライズ）に選ばれた込戸さん。木彫とそれを拓にとった「山水画」の作品です。彼女はいつも相模原キャンパスの屋外でチェーンソーを使って大きな木の塊と格闘していたので、目にした人も多いでしょう。何回か中国に行って、山水画というものを自分なりに考えてもいる。洋画専攻ですが、いろいろな手法を自由に行き来している感じがします。

竹内：最初に見て好きな作品だなと思いました。二階に一点だけ展示されていたのがすでに印象的で、それが序章となって三階

に導いてくれました。

杉田：実は上の階まで上げられなかったんです。大きな作品なので、できれば揃えたかったですね。でも、この作品のスケール感やBankARTの荒削りな感じと合っていますね。個人でこれだけの場所を確保するのは大変だし、その意味ではいい機会だったのではないのでしょうか。

竹内：ただ欲を言えば、もっとほかの見せ方もあったのかもしれないと思います。ただ単に新しいタイプではないし、伝統に拠っているだけでもない、根源的なものを掘り下げていると思うからこそ、この作品の鋭さをもっと直球で見たかったとも思いました。とはいえ、ここまで思いっきりやったことは凄いです。一生の財産になります。私も学生には卒業制作展では「思いきり暴れる！」と言っています。最初からこじんまりまとめようなんて思ったら、たいがい空間に負けます。

### 長尾萌子「名刺」

杉田：次はOrange Prize（オレンジ・プライズ）の長尾さんの作品。これはネームカードに有名人の名前が手書きで描いてあるだけなんですけど、これだけたくさんあると力を感じる。偶然ですが、今年は、小さいものを集めるというタイプの作品がたくさんあります。長尾さんの作品に戻ると、仏陀、スヌーピー、ガリガリガリクソンなど、かつて生きていた人や想像上の生きもの、芸人と、とりとめなくみんなが知っている名前が並んでいるとクスッと笑える。いったい大学のどこの専攻に行ったらこん



なこと教えてくれるんだろうとも思っています。でもそもそも、表現することは自分で見つけるものだとことを、あらためて考えさせられます。

**竹内:** この作品を見ることによって、見ている側の記憶が喚起されると同時に、描いた人の主観や記憶を思わず想像してしまうことにもなります。一見、ただの名刺じゃないかとも言われかねないし、確かにひとつの文字情報ではあるけれど、手描きで描かれたというプリミティブなところがあるからこそ、じつはいろんな問題がこの中に含まれていると思います。そういう意味では暴力的な面も持ち合わせている作品です。

## 大竹純子「ひとりあそび」

**杉田:** 今日、いつもパフォーマンスをやっている学生が来てくれています。短大で絵画をやっている大竹さんの作品も展示されているので、本人から一言もらいたいと思います。



**大竹:** 普段から毎日いろんな格好をして学校に通っています。私にとっては本当に普通のことですが、みんなからは不思議だねって言われています。専攻科に入ってから、これを作品にしてみようと思っていて、文化祭でやったらうまくいったので、卒業制作も自分のパフォーマンスを写真にしました。

**竹内:** 毎日のパフォーマンスも、その都度写真に記録しておくといいですね。ぜひ、50歳、60歳、おばあちゃんになるまで続けてほしいと思います。一発屋と思われるしまうのはなんか悔しい気がします。奇抜なことやおもしろいことをして人を喜ばせたい、というその意識を持続してほしいと思いました。

## 小磯郁子「私」の本、「本」の私

**杉田:** 賞は逃しましたが、興味深い作品が小磯さんの本棚の作品。小さな本棚に文庫本が並んでいます。著者名が全部、小磯さんの名前になっています。装丁と帯のコピーとデザイン、裏表紙には内容の要約もあります。でも、中を開くとページは真っ白。とてもコンパクトな作品ですが、本の

在り方自体を問うおもしろい作品だと思います。



**竹内:** 非常に素朴な作品ですが、とても面白いですね。私自身、人の家に行くついでに本棚に目がってしまうのですが、どの本を捨ててどの本を残すのか、そしてどのように並べるのかといったことに、けっこうその人が赤裸々に見えてしまうところがある。今ならパソコンに入っているブックマークに同じ意味があるように思いますが、本棚というのは何世紀もの間、そういうものでもあったわけです。彼女はあえてそれぞれの本にキャッチコピーをつけていて、自分自身の今に対して冷静に突っ込みを入れつつモノ化しています。そうやって誰にでも共通するような自己意識をうまく表現しているように感じました。ここからどう展開されるのか楽しみです。

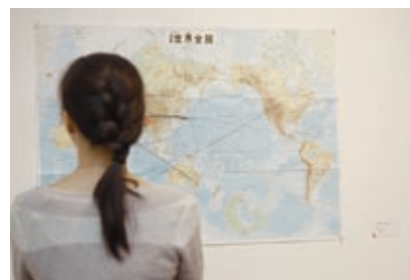
**杉田:** 作品を制作する上で、考え方とかコンセプトはすごく大切です。僕たちは、本の働きとして、文章があって内容があって、それで何かを伝えるんだと思い込んでいるけど、それだけじゃないってことに気づかされる。やられたという感じがあります。目立たないけど素敵な作品です。

## 水野久美子「点の調べ」

**杉田:** 今回 Red Prize (レッド・プライズ) に選ばれたのは、水野さんの音の作品でした。文章の中の句読点を音符にしてピアノの音にしていったものです。水野さんの最初のテーマは文章中にある「句読点」でした。点だけを拾っていくといろんな形が出てきて、これを音にしたらおもしろいのはと思ったのだそうです。文章を読んで音が生まれたらどうなるんだろうという素朴な問いから生まれた作品です。

## 阿部真矢子「play a map」

**杉田:** 阿部さんも音の作品です。彼女は世界地図の都市を一つひとつ音に変換しました。音の作品は全体で3点で、偶然ではありますが、過去4年間の女子美スタイルにはなかった。でも、突然3つも出てきた。女子美術大学には、音の専攻はないけれども、誰からも教えられないものを使って作品を



つくる、そこがおもしろいし、驚きでもありました。

**竹内:** 水野さんの作品は文庫本の句読点にルールを決めて音譜化し、ピアノ曲が流れるというものでした。私は『人間失格』と『キッチン』を聞きましたが、本というメディアをこのように「読む」ことができるのかと新鮮な驚きを覚えました。阿部さんの作品は、世界地図の上の点と点がつながっていくところがダイナミックで面白い。視覚と聴覚をつなげる作品として興味深いです。「共感覚」という言葉をご存知でしょうか？もともと人間の五感というのはお母さんのお腹の中で、一つになっていたものが徐々に分かれていったものです。しかしその分化が完全ではなく、視覚と聴覚などの独特な結びつきを持つ人たちもじつは少なくないそうです。ジャズ・ミュージシャンのマイルス・デイビスや画家のカンディンスキーなどは共感覚を持っていたと言われていています。人間の感覚をめぐって様々な考えさせてくれる、いい作品ですね。

**杉田:** アートは視覚だけではないと言ってきたことが、作品としても出てきた、そんな感じでした。

## 中村萌「germ」

**杉田:** 次に Violet Prize (ヴァイオレット・プライズ) の中村さん。彼女の作品は重量があって持ってくるのが大変でした。でも、どこに置いてもマッチする不思議な魅力が



杉田 敦教授

ある。廊下に置いてあたたかも最初からあったような感じがする。独特の世界観を持った人だし、作品だなと思いました。

**竹内：**あたかも当然のごとくここにある、というのがその通りの印象でしたね。一見メルヘンチックのように見えて、「面」というほかないような顔が彫刻と見事に一体化している。ほかの作品もぜひ見てみたいと思いました。

**杉田：**僕は本人を知っていますが、どことなく自画像っぽいですね。どの分野においてもセルフ・ポートレートという創作は決してなくならないと思います。マーク・マンダースはインスタレーションの空間も自画像であると言っていますね。

## 戸田沙也加「Style」

### 少女群像図「窓」 少女群像図「劇場」



**杉田：**Yellow Prize(イエロー・プライズ)の戸田さんは説明しがたい独特の世界を描いています。取り憑かれたように少女を描いています。一度見たら忘れられません。

**竹内：**少女と狼という、モチーフとしては象徴性が高くじつは相当難しいものにトライしたと思います。ものすごく丁寧に緻密に描いています。またこの作品を見て、制作における「距離」ということについて考えさせられます。ものを作るときはある種のクレイジーさが必要ですが、しかし作家としてやっていく場合は社会に対してアクションを起こすわけですから、第3の目を持たなければならない。それは自分と社会に対する冷やかな目。その意味で彼女はこの作品を丁寧にきちんとつくっているのだから、これだけこなせる人が今後どうなるのか楽しみです。

**杉田：**今回もグランド・テーマは「芸術、女性、社会」でしたが、毎回その年によって作品の傾向は変わってきています。今年は、

具体的なものを描いている人が多かった。選考するときにはいつも、学生たちみんなが、時代の変化や空気をなんらかのかたちで察知しているということ。何か今の時代の雰囲気や反映されているように思います。

## 広井彩香「穴」

**杉田：**Orange Prize(オレンジ・プライズ)の広井さんのピンホール・カメラの作品ですが、一つひとつはあまり意味はないけれど、これだけ集まると考えさせられます。全体として伝えようとするものは、実際に見えているものとは異なります。

**竹内：**ここにはたくさんテーマがあります。一見、印画紙を細長くしたり丸くしたり、決して上手な展示ではなくて、ちょっとゴミみたいにも見えるのですが、「何だろうこれ?」と思わせるものがあります。ピンホール・カメラの技法は暗箱に小さな穴を開けて光を入れると向い側の面に像が写るというもので、この針穴現象については、古くはアリストテレスの時代から知られていました。ヨーロッパでは教会の鍵穴を通して室内に像が写ることによって人々が気付いたり、日本でも『富嶽百景』に兩戸の節穴から富士山の像が写し出される状況が描かれていたりしています。そういう意味で、彼女の作品にはイメージの始まりへの言及があるように思います。クレラップの箱やお菓子の缶という一番日常的なものを使って、地平のレベルでそれを実践していますね。チェコにミロスラフ・ティシーというカメラマンがありますが、彼はゴミからカメラをつくって、自分の好きなものや女の人たちを撮っています。さらに丸く切られたプリントについて、もう一度思い出さなければならぬのは、イメージというのはそもそも円形だったということなんです。我々は通常、四角をした写真や絵を見ますが、イメージ自体にとっては、円や穴というのはとても根源的なものです。

**杉田：**今回の特徴として、ある一定のものを、集めていくというタイプの作品がけっこうありました。そうした指導をしている先生の存在が出てしまっているということもあるかと思いますが、



竹内 万里子氏

**竹内：**全体の印象として、まさに「反復」ということがありました。一つのタブローに執着するというより、何かを反復しながら集めているという制作行為が多くみられました。それは、作品の一点性に対する一つの姿勢を提示しているように感じます。また、展示方法においても、ただ壁を使うのではなく、床も意識化させているものがあった。そうやって途上にあるという感覚、コンプリートではないということを作行為の根本として前向きにとらえている作品が多かったのが魅力的でした。卒業制作だから終わりなのではなくて、これからが楽しみです。

**杉田：**集めていくという行為は、継続しているということ表現しています。つまり終わりじゃないということです。ところで、今回は、その「繰り返し」と、「少女」が、キーワードだった。

**竹内：**女子大というのは非常に特殊な環境だと思います。やはりそれぞれに、どこか自分ののびきならない女性性とか少女性の問題を抱えている。でもそういったものにただ寄りかかるとはではなく、すごくクールにいろんな角度から取り組むことが大事なのだと思います。私たちの中にも、ある種の女性に対する暗黙の思い込みがあって、気づかないうちに偏ってしまっていることがあるでしょう。だからこそ、まずは自分の中にあるそれを疑う必要がある。既存の女性観に迎合するのではないという姿勢を、女子美の学生さんや卒業生の皆さんがこれからどのように展開していかれるのか、とても楽しみにしています。

**杉田：**どの作家にも創作活動を続けてほしいと思います。

## 竹内万里子(たけうちまりこ)

写真批評家。京都造形芸術大学准教授。東京国立近代美術館客員研究員を経て現職。早稲田大学文学学術院および同大学芸術学校非常勤講師。2008年、パリオート日本特集のゲストキュレーターを務める。同年から翌年にかけてフルブライト奨学金を受け渡米。主な著書に『日本の写真家101』(新書館、共著)など。

## Lecture ● アート・デザイン表現学科連続トークイベント 「心と心をつなぐ4つの物語」後編

2010年4月、杉並キャンパスに開講した四年制学科、アート・デザイン表現学科の誕生を記念し、プライベートとして2009年11月、12月に4週連続でトークイベントを開催。新学科を構成する「メディア表現」「ヒーリング表現」「ファッションテキスタイル表現」「アートプロデュース表現」の領域ごとに、各界で活躍するゲストをお招きし、興味深いお話をいただきました。今号では、3週目、4週目のイベントの様子をお伝えします。



12月12日 **ファッションテキスタイル表現領域**

### ファッションテキスタイル表現の地平から「ことばに愛を織り込んで」



元NHKエグゼクティブアナウンサー、前アナウンス室長として活躍され、現在はLLP「ことばの杜」代表を務めることばのスペシャリスト、山根基世さん。これまで400人以上のアーティストの方々にインタビューされた経験から、アートとことばの関係性、ことばのもつ力についてお話いただきました。

#### ことばを育てる=こころを育てる

2007年にNHKを退職してから、こどもことばを育てる「ことばの杜」の活動を始めました。一瞬の激情にかられて、取り返しのつかない事件を引き起こすこどもが増えてきました。その背景には、自分の気持ちをことばで表現できない、ことばで周囲の人と良い関係を築けないという、「ことばの力」の欠落が指摘されているからです。

私たちNHKのアナウンサーは、放送開始以来80年以上※「アナウンサーなんだから誤ったことばを使うな」とお叱りを受けながら、正しい話しことばを担ってきました。そのノウハウをこども達のために社会還元しようと、小・中学校をまわって国語の授業を担当したり、親子を対象に本の読み聞かせを行ったりしています。今までの国語教育は読み書きが中心で、平成から話しことば教育が始まりました。しかし、学校をまわると、スピーチやディベートと

いった発表力だけが強いこどもが多い。

言葉は時代とともに動くものです。例えば“ら”抜きことばのように正しくない日本語でも、50%の人達が使えば慣用になり、ほとんどの人が使えば正しいことばになります。私にとって「ことばを育てる」とは、誤りを正すのではなく、「口は心にあふれるものを語る」のを感じてもらうこと。ことばを育てるとは、こころを育てることです。こども自身が、日々の暮らしの中で良好な人間関係を築き、自分らしい生き方ができる、人間力としてのことばの力身につけてほしいと思っています。

#### アートにも“ことば”が求められる

私はNHKで12年ほど美術番組を担当し、400人以上のアーティストに取材しましたが、「どういう思いで作り、何を表現しているのでしょうか？」と遠まわしに聞くことが、いつも心苦しかったです。

ことばにならないものを表現しているのに、メディアはことばで表現してもらうことを求める。でも、突き放す人は誰もいなかった。かならず自分を掘り下げ、一生懸命ことばにしようとしてくれました。今の時代は、好むと好まざるにかかわらず、テレビに出ることが付加価値でもある。いい話をする先生は、「作品はともかく話がいいから出演してもらおう」ともなりかねない。アートにとっては不幸なことだけれど、そういう時代でもあることを覚えておく必要があると思います。



#### ことばの地層を、深く広く柔らかく耕す

学生のうちに、自分の目でものを見て、考える癖をつけ、自分のことばを養ってください。自分の目でものを見るには、精神を自由にすることが大事です。私がアーティスト達からうかがった、自由な精神を獲得するためのことばを紹介します。

具体美術協会で活動していた元永定さんにお話を聞いたとき、「僕は我流だ」とおっしゃった。「我流でもいいでしょうが、基本がないとコンプレックスになりませんか？」と聞いたら、「基本で何ですか？基本は人間やないですか。我流こそ一流。ピカソはピカソの絵を描いたから一流。ピカソがマチスの絵を描いたら三流。自分で自分の絵を描く意味、それが一流や」と。

また、彫刻家の佐藤忠良さんは、「彫刻は立ってなければいけない」とおっしゃった。立像をご覧になって、「あれは立ってないね。生きとし生けるものは重力に抗いながら生きています。その重力を踏まえたら先に表現があるんだ」と。彼は、ロダンの「自然が基本」ということばを大切にされた人です。ことばは、肉体の発声器官を通して声になる。アートにしることばにしる、人のところに届くには、自然を踏まえ、自分の自由な表現を探っていくことなんですね。

ことばという地層が、深く、広く、柔らかく耕されているほど、そこには実り多い表現が生まれます。ことばは、あらゆる表現の基本になっていくのだと思います。

#### 山根基世さん (LLPことばの杜 代表)

早稲田大学文学部卒業。同年NHK入局。主婦や働く女性を対象とした番組、美術・旅番組、ニュース、「ラジオ深夜便」等を幅広く担当。NHKスペシャル等の大型番組でも、原稿を隅々まで耕し、手を入れた語り、見るものに深い感慨を醸成させる。2000年 第26回放送文化基金賞受賞。2005年、女性初のアナウンス室長。2007年NHK退職後「ことばの杜」を設立し、「日本の話し言葉を育てる」を理念に、放送経験を生かした社会貢献活動を行っている。2009年 第9回徳川夢声市民賞受賞。

※1950年設立のNHK(日本放送協会)は、1926年設立の社団法人日本放送協会の業務を継承しているため。

12月19日 **アートプロデュース表現領域**

## アートプロデュース表現の地平から「人間の国、イタリアに魅せられて」



古代ローマ研究の権威・青柳正規さんと、ミラノを拠点に活躍してきたデザインプロデューサー・佐藤和子さん。お二人が感じるイタリアの魅力について、たっぷりとお話いただきました。また、イベントの最後には観客の皆さんからたくさんの質問が寄せられ、イタリアへの関心の高さがうかがえました。

### 明るく、人間味のあるイタリアの魅力 青柳正規さん

私は1969年にナポリ大学に入学し、在学中、考古学者としてのスタートを切りました。それからというもの、1976年のポンペイに始まり、シチリア島のアグリジェント、タルクィニア、つい最近までソンマ・ヴェスヴィアーナの遺跡発掘に携わりました。

40年もイタリアの地面ばかりを見てきたので(笑)、イタリアの本当の素晴らしさをそれほど深くは理解できていないかもしれませんが、でも、私はイタリア人、特に南の、大雑把で明るくて、人間味のあるところが大好きです。

また、古代、中世、近代と、どの時代を見てもイタリアからたくさんの芸術家が生まれていますが、彼らの故郷に住む人は今でも彼らを誇りに思っています。こうした



素直に人を礼讃する姿勢を、私たち日本人も見習うべきだと感じています。

### 現在の道を決めたイタリアでの活動 佐藤和子さん

女子美を卒業した1961年に渡伊し、ブレラ芸術大学に留学しました。その後、インテリア、デザインなど、あらゆるデザイン活動をしてきましたが、現在のデザインジャーナリストの道を進むきっかけとなったのがアルキミアです。アルキミアとは1979年、ミラノに発足したアバンギャルドデザイングループ。ここで私はデザイナー、エディター、キュレーターとして、素晴らしい仲間とともに活動しました。あらゆる展覧会やショーに携わりましたが、そのどれもが印象深く心に残っています。

イタリアは、包容力のある国。国籍の違いなんて関係なく、どこにいても仲間として受け入れてくれました。楽しいことを一緒にやったり、何かあれば助けてくれたり……。そうした仲間が日本だけでなく、イタリアにもいることは何よりの幸せです。

### 語り尽くせぬイタリアの魅力

——青柳さんはナポリ、佐藤さんはミラノに拠点を置かれていましたが、それぞれの特徴は？



青柳 ナポリには火山があり、過去には噴火したことがあります。でも、火山の噴火は土壌を豊かにする。そのおかげでナポリでは農作物が育ちやすいんです。ナポリ人は温暖な気候、恵まれた土壌を生かして、昔から一生懸命働いてきました。しかし、才能のある若い人はミラノに集まるんですね。というのも、ミラノは昔から産業が発達していますし、文化的にも国内の他の都市をリードしてきたのです。

佐藤 そういえば、ミラノではミラノ人よりもローマやシチリア出身の人が活躍するケースがよくありました。いろいろな人が集まるので、非常に刺激的な土地ですね。——イタリア人は日本人のことをどう思っているのでしょうか？

佐藤 今、イタリアは『日本ブーム』。寿司バーが街のあちこちにできています。それから、ファッションも日本のファッションを学ぼうとしている人がいるほどです。特に若い人は日本に対する憧れが強く、日本に留学したいという学生さんが増えているみたいです。

青柳 ハンマースホイという画家の作品に、部屋とそこにいる女性の後姿を描いた絵画があります。イタリア人の友人とその作品を観ていて、「これはきっと夫婦げんかをして、奥さんが旦那さんに背中を向けて沈黙しているところだ」と言ったんです。そうしたら友人は、「日本ではそんな素晴らしいことがあるのか、イタリアではげんかになったら24時間怒鳴り合っているよ。日本人は本当にやさしくていい人だ」、と(笑)。夫婦げんかはあくまでも例ですが、このようにイタリア人と日本人とでは、行動や考え方に大きな違いがあるんですね。そこに日本の良さを見出しているのでしょうか。

### 青柳正規さん (国立西洋美術館長)

1967年東京大学文学部美術史学科卒業。1969年ローマ大学留学。現在、国立西洋美術館長を務めるほか、西洋古代美術史家として活動を展開している。主な著書に「ローマ帝国」(岩波ジュニア新書)、「知識ゼロからの美術館入門」(幻冬舎)、「人類文明の黎明と暮れ方」(講談社) など多数。

### 佐藤和子さん (女子美術大学同窓会長、 デザインプロデューサー)

1961年女子美術大学芸術学部図案科卒業。同年ブレラ芸術大学留学。デザイナー&デザインジャーナリストとしてミラノを拠点に日伊文化展などで活躍。主な著書に「終わりなきイタリアデザイン: アルキミア」(六耀社)、「時を生きるイタリアデザイン」(TBSブリタニカ) など。

## 2009年度クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート 海外スプリング・スクール報告



大学と短期大学部の学術交流協定大学である豪州クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート（以下 QCA）において、2009年1月22日から同2月21日までの間、海外スプリング・スクールが開催されました。このスクールは、本学と QCA が共同で企画した美術・デザイン実技授業を中心に構成されており、今年で第三回目の実施となりました。参加した9名（大学6名、短期大学部3名）は出発前にオリエンテーションと英語研修を約2ヶ月にわたって受講し、渡航しました。

### 第1週目 グループ交流・自己紹介プロジェクト+ジュエリー・プロジェクト

グループ交流・自己紹介プロジェクトでは、二人一組になって外から見た相手のイメージを互いにドローイングしあって交換し、次に内側から捉えた自分自身の特徴を描き加えました。日本から持参した家族の写真や、自分らしさ（アイデンティティ）をもたらす素材も使って、他者と自己の両面からみたポートレートを作り上げました。ジュエリー・プロジェクトでは、銀、銅、真鍮、アルミニウムを用いて、オーストラリア滞在の印象や自分が好きなものをモチーフにデザインして、アクセサリーを作りました。複数の金属や加工技術を組み合わせ、動物や植物など様々な形の作品が出来上がりました。



自己紹介プロジェクト

### 第2週目 グラスハウス山プロジェクト+インディジネス・アート・プロジェクト+版画

グラスハウス山プロジェクトでは、まずプリズベン郊外のグラスハウス山とサンシャインコーストを訪れ、屋外での情報収集からスタート。アボリジニーの言い伝えが残る珍しい形の山々や周辺の森、浜辺を探索し、自然から得たイメージをスケッチブックに描いたり写真に収めたり、落ち葉や貝殻を集めました。大学に戻ってから、集めた記録や材料を使って、山と海の風景やその色や光から得た印象を、ドローイングやスタンプなどで自由に表現しました。QCAの学生も参加し、交流が深まるプロジェクトになりました。インディジネス（先住民）・アート・プロジェクトでは、ア



グラスハウス山プロジェクト

ボリジニー独特のアートである、小さな箱の中に家族の歴史や風習を表す写真やものを配置して作品として完成させる「メモリー・ボックス」を制作しました。豪州先住民である講師から先住民の歴史や自身の作品のコンセプトの説明を受けた後、各自で家族と自分との繋がりを表現する作品を制作しました。版画では、モノ・プリント技法とエッチング技法を修得した後、二つの技法を組み合わせたり、レースや植物



インディジネス・アート・プロジェクト

など立体的な素材を版に使ってみたりして、数多くの版画を刷り上げました。

### 第3週目 屋外プロジェクト+コレクター・ギャザラー・プロジェクト

屋外プロジェクトでは街の中心部にある

植物園を訪れ、ガイドから園の成り立ちや植物の説明を受けながら園内を探索。特に、豪州特有の植物の葉や種や幹に見られる、繰り返しの形のパターンやリズム、模様に着目してスケッチや写真撮影をし、修了制作へのアイデアを溜め込みました。次に取り組んだコレクター・ギャザラー・プロジェクトは、リサイクル・アートに挑戦する課題です。ガラクタのように思える各種部品やセカンドハンドの古い物を破格の値段で売る店に出かけ、15ドル以内で材料を購入しました。かつては別の役割を果たしたこれらのパーツを組み合わせ、新たにユニークな立体作品として蘇らせました。



コレクター・ギャザラー・プロジェクト

### 第4週目 修了制作

最後の課題は修了制作とその発表です。作品コンセプトや技法を自分で決めるのはもちろんのこと、その完成度とこれまでの制作作品が評価の対象となります。修了作品展示会場には QCA の講師陣・学生・スタッフやホスト・ファミリーなど多くの人々が訪れ、賑わいました。プログラム最終日には、学生によるプレゼンテーションと講師による講評の後、QCA 代表から修了証書が全員に手渡されました。続いてお別れパーティーが催され、お世話になった方々との別れを惜しみました。学生全員の中には充実感が溢れていました。



修了作品展



## NEWS ● ② スクール・オブ・ヴィジュアル・アーツ(アメリカ)との学術交流協定締結

2010年1月11日付で大学と短期大学部はアメリカ・ニューヨークのスクール・オブ・ヴィジュアル・アーツ (School of Visual Arts、以下 SVA) との間で学術交流協定を締結しました。この協定では、学生・教職員・研究者・学術情報資料の相互交流、共同研究、国際会議への参加支援などの活動が行われます。本学学生の間ではアメリカは留学希望国上位にランクされる魅力溢れる国です。特にニューヨークは世界の美術・デザイン界を牽引する大都市であり、マンハッタン島の中心に位置する SVA と協力関係を構築することは本学の教育研究活動に大きなメリットをもたらします。学生交流を活動の中心とし、2010年8月に本学学生を対象とした「海外サマー・スクール」を現地で開講するのをは

じめ、4ヶ月から1年の期間で本学学生の派遣と先方学生の受入れを行います。

SVAは1947年に創立されました。視覚デザインや映像の分野で全米トップクラスの評価を受けており、アメリカを代表する美術・デザイン系大学としてその地位を確立しています。学生数は3900名で学士課程と修士課程を設置しています。教育研

究領域は、広告デザイン、アニメーション、マンガ、コンピュータアート・コンピュータアニメーション・視覚効果、映像・ビデオ、美術、グラフィックデザイン、イラストレーション、インテリアデザイン、写真、視覚芸術批評(以上、学士課程)があり、視覚造形全般を網羅しています。

(国際センター)



キャンパスビル正面



セントラルパークの一角

## Topics ● ① 2009年度協定外国人留学生の留学レポート(フィンランド編)

大学と短期大学部は2006年にヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学文化学部(フィンランド)と学術交流協定を締結して以来、学生交流を積極的に推進しています。2009年度に本学へ協定留学した学生はどのような日々を女子美で過ごしたのでしょうか。彼女たちの留学レポートをお伝えします。

(国際センター)

## Liisa Stenberg

本学での所属: 芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコース

日本に到着した時、まさかこんなに学習面で充実し、面白く楽しい一年が待ち受けているとは思いませんでした。最初の1ヶ月は、一日の授業がハードスケジュールだったのと、日本語にとても苦労したのがあって、少し辛い時期でした。日本留学前に日本語を約2年間勉強していたのですが、日本語を話す勇気が出て、会話を簡単に理解できるようになるには、数ヶ月かかりました。しかし、それから9ヶ月が経った今では、クラスメイトと日本語のみの授業を受けて大学生活を過ごせたことをとても嬉しく思います。私はクラスによく馴染み、たくさんの友人を作ることができました。彼女たちはこれからもずっと連絡をとりあっていきたい大切な友達です。

## Noora Fieandt

本学での所属: 芸術学部メディアアート学科

日本留学で得た重要なことは、学習内容そのものというよりも、自国の文化から離れて、プレッシャーやストレスの中で生き延びながら、新しい文化に浸かって生活することでした。友達ができたことは前に進むための重要なステップであり、おかげで馴染みのない土地でも安心して過ごすことができました。私は留学前より自立し、人生におけるさらに大きな挑戦に立ち向かう準備ができました。より深い知識や考え、理解力、もっと勉強したいというエネルギーを得られたと感じています。この留学は、変化と新しい価値観や世界観を持ちたいという私の期待に応えてくれました。たくさんのことを教えてくれ、自身の成長のためにとっても重要な5ヶ月間でした。

## Linda Nordberg

本学での所属: 芸術学部ファッション造形学科

フィンランドで通う大学では、デザインのプロセスよりも実際に作品をつくることに時間をかけますが、女子美ではそれが逆でした。構想を練る時間を十分に与えられることに感動しました。学内は穏やかで、学生は付き合いやすい雰囲気でした。フレンドリーで、私に分らないことがある時や、機械の使い方や手助けが必要な時には、進んで助けてくれました。また、多くの学生がフィンランドや私が通う大学に興味を持ってくれることに驚きました。日本語でのコミュニケーションが難しいことも頻繁にありましたが、クラスメイトや教職員の方々の温かいサポートのおかげで、私はクラスにとけ込み、他の学生のように授業についていくことができたと感じています。

## Topics ● ② &lt;日本+米国美術大学 国際交流展&gt; Paper Works展

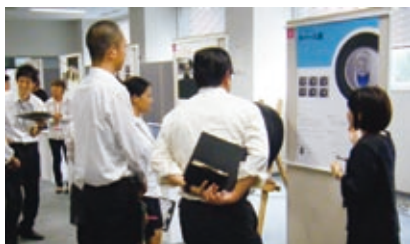
1月7日から1月23日、杉並キャンパス近くの女子美ギャラリーニケにて、「Paper Works展」が行われました。本展覧会は紙アートプログラムがある本学の立体アート学科と米国4美術大学の国際交流展。本学の他、米国のマウント・ホリヨーク大学、カリフォルニア大学サンタバーバラ校、アリゾナ州大学、アート大学フィラデルフィア校の教員と学生による紙のアート作品、68点を展示しました。

また、本展覧会の会期中、1月12日には、米国のマウント・ホリヨーク大学美術学科で教鞭をとり、国際的に活躍されている八柳里枝先生を本学にお招きし、米国の美術大学における手漉きの紙やアートな紙についてご講演いただきました。

(芸術学部美術学科立体アート専攻)



## Topics ● ③ (株)東海理化電機製作所 産学協同プロジェクト



自動車用部品を製造している(株)東海理化電機製作所(以下、東海理化)の委託を受け、本学デザイン学科の学生7名が「自動車を取り巻く通信技術の応用～思わず微笑む～」をテーマに、カー用品の企画、デザイン、そして試作品の製作を行いました。

プロジェクトは主に昨年の春休み、夏休み期間中に行われました。実習に参加した学生の多くは運転免許を持っておらず、普段自動車に乗る機会が少ないということもあり「自動車」というテーマに、なかなかアイデアが出せずに苦労していましたが、本学デザイン学科の田村俊明教授や助手の先生方、そして東海理化デザイナーの方々アドバイスを元に、女子美生らしい斬新な発想のカー用品を次々に考え出していきました。試作品製作の段階では、今まで触れたことのない素材や加工法に取り組みなくてはならず、失敗してしまう場面もありましたが、その経験を生かし、実際に販売店に置かれていても違和感のない、質の高い製品が完成しました。

昨年9月には、愛知県にある東海理化本所でプロジェクトの発表会が行われ、学生それぞれが約300名もの社員を前に自分の作り上げた製品をプレゼンテーションし、社員の方からの質問にも、丁寧に、しっかりと答えていました。そしてプロジェクトの締めくくりとして11月には都内のギャラリーにて展示会が行われ、自動車関連企業の方々をはじめとした多くの方々が見

訪れていました。

その後もこの取り組みは自動車専門誌な

どで取り上げられ、多くの反響が寄せられています。

### <参加学生の声>



「YŪMA」

ラジオ無線を受信してくれる車内の相棒。

#### 大畑 彩さん

デザイン学科プロダクトデザインコース4年  
今回のプロジェクトは本当に学ぶことばかりの体験で、充実した時間を過ごせたことに喜びを感じています。その後の制作でも学んだことがすぐに生かせ、私自身が真に求めている実践的な技術を学ぶことができたのだな、としみじみ実感しました。なにより東海理化の方々指導を通じて私たちの今後の成長を考えてくださっていると感じられたことが、とても嬉しかったです。



「hello taxi!」

お客さんとコミュニケーションのとれるウィンドウサイン。

#### 寺井 茉央さん

デザイン学科プロダクトデザインコース4年  
笑いあり、涙ありの実習でした。常に周り意見とを言い合いながらの制作という、普段の学校の課題とはひと味違うプロセスを踏み、企画立案、デザインからモデル制作、そしてプレゼンテーションまで基本から経験を通して学ぶことができました。



「mlroom」

走行距離に応じて成長する車内で飼うペット。

#### 川野 恵さん

デザイン学科プロダクトデザインコース4年  
今回、この産学協同プロジェクトで得たものは数え切れません。制作過程で技術的な勉強ができたのは勿論のこと、アイデアの掘り下げからプレゼンテーションに至るまで、学内にいるだけでは経験できないような場を与えていただき、それだけでも参加した意義があったように思います。



「ホイール缶」

走行中に蓄電し停車中に点灯する機能つき。

#### 内藤まり菜さん

デザイン学科プロダクトデザインコース4年  
最初から最後まで、悩める日々でした。失敗や、思うようにいかなくて、一週間ひたすら型を削っていたときは、修行のようでした。そして、仕上げに近づくにつれて、緊張の連続で心臓が持たなかったのを覚えています。技術や道具など、いつもとは違う世界に触れた、貴重な体験でした。

## Topics ● ④ 短大生のための就職フェア in 杉並キャンパス

1月21日、22日の2日間、「短大生のための就職フェア in 杉並キャンパス」を開催しました。このイベントは、昨年10月に相模原キャンパスで実施した「就職フェア」(集中学内企業説明会)を短期大学の学生に合わせた内容にして実施したもので、参加企業も短期大学の学生に強い採用意欲を持つ企業が多数参加しました。今回の企業説明会では現在勤務されている本学卒業生が来校し説明をくださった企業が多

く、参加した学生たちが真剣に先輩方の説明を聞いている姿がとても印象的でした。

今回の「短大生のための就職フェア」で実施された9社の企業説明会と履歴書講座には延べ498名もの学生が参加し、短期大学の学生の就職活動に対しての高い意欲が感じられました。

### <参加企業(業種)>

広告制作会社、服飾、ゲーム機器制作、アニメーション制作、インテリア雑貨などの業種から9社



## Topics ● 5 相模大野駅のディスプレイアートを制作

デザイン学科の学生8名（綾部美夢さん、井藤葉子さん、井上亜季子さん、井本菜津子さん、上野彩さん、荻原加奈さん、金森美佳子さん、金子詠美さん）が、小田急線相模大野駅の駅前ビル、相模大野ステーションスクエアのディスプレイデザインを行いました。「老若男女、みんなで楽しむバレンタイン」というコンセプトのもと、全てのひとに贈るという思いをこめて「DEAR」とタイトルをつけ、2月5日から駅前を歩き交う人の目を楽しませました。

このディスプレイが出来上がったきか

けは、毎日の通学中、季節ごとに変わるディスプレイを見ながら交わした、「もし、デザイン学科の学生がディスプレイをデザインしたら楽しいよね」という一言から。実際に、相模大野ステーションスクエアの担当者、藤井氏にプレゼンテーションを重ね、実現に至りました。制作を行った女子美生は、「もともと私たちの希望でしかなかったのが本当に実現できるとは思っていなかった。実際にディスプレイが完成し、私たちの大きな自信になりました。」と、話してくれました。



## Topics ● 6 「吉祥空園sora」の展示報告

吉祥寺伊勢丹FFビルの3階に屋上庭園「吉祥空園 sora」が、2006年11月にオープンし、その中の「アートスペース」（屋外、3×3m）を、管理者である（財）武蔵野市開発公社のご厚意により、女子美術大学に貸していただき、2007年12月より展示をおこなっています。昨年の展示作品は…  
①桜井 龍（デザイン学科助手） ②小森谷 薫（大学院工芸（陶）2年） ③四方建雄（デザイン学科助手） 松永ちひろ（大学院工芸（陶）2年） ④石井球子（短期大学部、空間コース助手） ⑤デザイン学科プロダクトデザイン学生19名 ⑥立体アート学

科学生の7期の作品展示をおこないました。とてもきれいな武蔵野のイメージの庭園です。女子美の広報も兼ねて、展示していま

す。お近くにお出掛けの際はぜひ、お立ち寄り、ご高覧ください。

（現デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻 田村俊明教授）



## Topics ● 7 東京デザイナーズウィーク2009

2009年10月30日～11月3日、明治神宮外苑中央広場に於いて、『東京デザイナーズウィーク2009』が開催されました。

今年度も、デザイン学科プロダクトデザインコースの4年生12名と、メディアアート学科の学生が「学生作品展」に参加しました。

今年度のテーマは「GREEN LIFE」で、昨年とは違い、屋外での展示でした。国内外の学校33校、39のグループから、約500点の作品が展示されました。学生作品展委員会の審査から、個人賞候補（20点）で、プロダクトデザインコースの浅香和美さんの作品①「Green hole」と、田口こ

すえさんの作品②「あなたにみどりはみえますか？」の2点を選出され、公開講評会で、プレゼンテーションが行われました。

女子美術大学の各ブースの作品は、多くの方々から賛辞をいただき、学生達は大いなる自信と誇りを得たようです。

（現デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻 田村俊明教授）



## Topics ● 8 「注染手拭プロジェクト」「B反手拭プロジェクト」発表展示



この度、「注染手拭プロジェクト」と「B反手拭プロジェクト」が合同で、2年間の取り組みの成果を発表展示することになりました。

「注染手拭プロジェクト」とは、職人の手によって染められる昔ながらの染色技法「注染」と、手拭のさらなる普及を目指して立ち上げられたプロジェクト。これまで、学科を越えて参加する女子美生によって、自由で新鮮なデザインの手拭が数多く生まれました。



一方、「注染B反手拭プロジェクト」は、ちょっとした染めムラや織ムラなどが原因で世に出る機会を失った「B反」と呼ばれる注染の染物を新たな布製品として提案するプロジェクト。手拭会社や注染組合の協力を得ながら、これまで処分されてきたB反手拭を、環境に配慮したエコでかわいい作品に再生してきました。これらの取り組みは教育GPのプロジェクトでもあります。

吸水性に優れ、肌触りがよく、使うほどに風合いがよくなる注染の染物。たっぷりした染料で布の芯まで染めるため、柄の輪郭がやわらかく、機械プリントでは出せない味わいを楽しむことができます。最近では、注染のデザインの面白さや伝統技法の見直しにより、注目が集まっています。

4月2日～15日、この二つのプロジェクトの発表展示が行われます。会場には、女子美生が自由な発想でデザインした手拭と、B反手拭を豊かなアイデアで新たなものへとデザインした作品や小物を、その取り組みの過程や研究発表とともに展示します。準備には、約30名の女子美生が参加。注染手拭の試作や実習は工芸学科染コースの学生が指導を行い、発表に向けた会場づくりやDMづくりはデザイン学科の学生が指



導を行いました。

また、これまでプロジェクトの中で参加学生が試作を重ねてきた作品が、このたび製品化されることに。「ぬぐい」と名づけられた女子美ブランドの販売に向けて、専門の職人が一斉に製品を染めあげました。この展示会場で初めて、発表、販売（株式会社アイシス）が行われます。今回の発表展示は、関東注染組合、関西注染組合をはじめ、日本各地の注染工場の協力を得て実現するものです。昭和25年から、注染の授業を取り入れている唯一の大学である女子美。どの大学よりも注染との結びつきの強い女子美の教育と、産業、職人が協力して実現するこの展示会を、みなさん是非ご覧ください。

＜H22年度プロジェクト参加者募集＞

冊子制作や手拭のデザインなどに興味がある女子美生を募集します。説明会参加希望者は、4月23日までに、工芸専攻大澤教授へご連絡ください。

ぬぐい—注染手拭と女子美の出会い—

日時：2010年4月2日（金）～4月15日（木）

場所：紀尾井アートギャラリー

江戸伊勢型紙美術館

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3-32

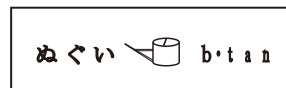
時間：11:00～18:00（休館日：毎週月曜日）

入館料：1000円（展示会チラシを持参の場合、

または本学の学生証・教員

証提示の場合500円）

問い合わせ：女子美術大学事業課（042-778-6144）



女子美ブランド「ぬぐい」のネームタグ

## Topics ● 9 日本都市センター緑道ギャラリーで作品展示

1月22日から3月22日まで、日本都市センター（東京都千代田区）緑道ギャラリーにて、大学院美術研究科立体芸術研究領域の学生5名（天沼穂乃実、市村多真美、小林舞花、松井香楠子、谷田部由美）が『SMALL SCULPTUER EXHIBITION vol.25 —A WORK JUNCTION—』と題した野外彫刻展を行いました。

会場となった日本都市センター会館に設けられた公開空地には、樹木を配した緑道があり、近隣住民との交流と若手芸術家に作品発表の場をつくることを目的に、「緑道ギャラリー」として若手芸術家の作品が展示されています。

大学院美術研究科立体芸術研究領域の学生は、継続的にこの「緑道ギャラリー」で展示を行ってきており、今回で5回目を数えます。野外空間での彫刻展は、展示会場

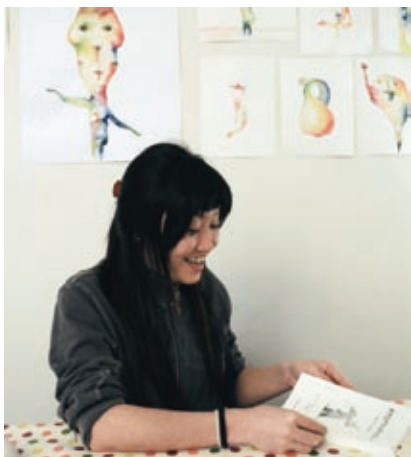


「seed」松井 香楠子



「20年前」天沼 穂乃実

## 100周年記念大村文子基金 第10回女子美パリ賞受賞者 いしばし めぐみさんエッセイ



パリにある国際芸術都市に毎年受賞者を  
研究員として派遣する100周年記念大村  
文子基金による「女子美パリ賞」。第10回  
受賞者で一年間パリに滞在していたいしば  
しめぐみさんが現地での様子を寄稿してく  
ださいました。

外の景色を見るたびに、ヨーロッパにい  
るのだと感じます。春にこちらへ来て夏、  
秋そしてもうすぐ冬が終わりを告げ始めて  
います。こんなにも季節を感じる1年は初  
めてのことです。

夏始めに知り合いが参加したシンポジウ  
ムの見学に行ってきました。その縁で秋に  
南フランスのオレゾンという村で行われた  
アーモンドフェスティバルに参加してきま  
した。アーモンドのお祭りのイベントの1  
つで、地元、国内外のアーティストが集ま  
り24時間公開制作と展示をするという企  
画でした。

ヨーロッパの教会にはマンドラミ  
スティカというアーモンド型の背光を絵やタ  
ンパン（教会の入り口上部を飾る彫刻）の  
中に多く見ることが出来ます。そこからヒ  
ントを得て「Mandorla Mistica Gate—  
繋がる人々・広がる世界—」というコンセ  
プトのもとに日本の伝統文化の折り紙の手  
法の一つである「ふうせん」を来場者に  
作ってもらい、それを繋げたインスタレー  
ションを行いました。作ってもらったふう  
せんには好きなようにサインや絵を描いて  
もらったのですが、ある1人の女の子が私  
の似顔絵を描いてくれ、それは今では私の  
大切な宝物となっています。今回の参加型  
公開制作は、アートに興味を持つ人ばかり  
でなくふらっと立ち寄った人達までも興味  
をもって声をかけ、多くの人が参加してく  
れました。アートという言葉がこんなにも  
コミュニケーションの手助けをしてしてく

いるのだと驚きを隠せませんでした。また、  
これに参加したアーティストのフィリップ  
さんが「日本人の着眼点は面白い。我々  
ヨーロッパ人とは違う方向から物をとらえ  
る。」と、話してくれました。私がこちらに  
来て感じていたことを、彼らも同じように  
見て感じてくれていることに興味を引かれ  
ました。

先日パリから電車で1時間弱のシャルト  
ルの近く、エキュブレ (Ecuble) という小  
さな村にある知り合いの家へ滞在してきま  
した。村の入り口には大きな十字架、そし  
て村の中心には教会。そして村の中を歩くと  
現在も使われている石作りの古い建物が  
たくさんあり、まるで時代が遡ったかの様  
な錯覚に陥ります。そして村の外には広大  
な田園風景と大きな空。とても印象的な所  
でした。何世代にも渡る人々の生活がこ  
こで営まれており、それはまさに過去の物で  
はなく、過去から現在へ今も続いている生  
活、そんな時間の重みを感じずにはいられ  
ませんでした。

歴史、生活、宗教そして言語がある1つ  
の基準を作り出し、それが物差しとなる。  
共通した物差しがあればたいていのことは  
人から人へ伝わると思うのですが、その物  
差しを持っていないと「さっぱり伝わらな  
い」といったことがあります。（こちらに來  
て多くのことがそうでした。）フィリップ  
さんはアートという物差しで我々のことを見  
てくれていたのだと思います。「アートには  
国境がない」どこかで聞いた言葉ですが、  
今回は本当にそう思える滞在です。

最後になりましたが、こんなにもすばら  
しい体験ができるのも、女子美の皆様のお  
陰なのだと思つづく思います。残りわずか  
となった滞在期間ですが、できる限りたく  
さんの物を見て吸収していきたいと思っ  
ています。本当にどうもありがとうございました。



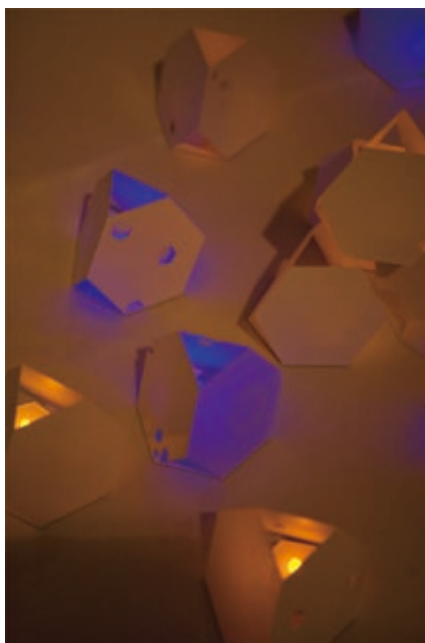
(上) ノートルダム大聖堂入口にあるマンドラミスティカ  
(右上) ノートルダム大聖堂内部  
(右下) ワークショップ

- 1996年 女子美術短期大学彫塑専攻卒  
個展  
2008年 「Fantasy Planet」 (Paris, France)  
2005年 ギャラリーひろば・東京顕微鏡病院内  
(飯田橋)  
2003年 ギャラリースペース游 (相模原)  
2001年 Key gallery (銀座)  
2000年 青禅画廊 (銀座)  
グループ展等  
2009年 La fete de l'amonde (Oraison,  
France) Hommage à Osamu  
Tezuka (Paris, France)  
ブサン国際環境芸術祭 -BIEAF (釜山、  
韓国/東京都)  
2008年 仕事部家+探訪~町田・相模原~ (神  
奈川県)  
雨引の里と彫刻2008 (桜川市、茨城  
県)  
石との響宴 (石の美術館 stone  
plaza, 那須、栃木県)  
2007年 Search an Image on Sand  
(Varanasi, INDIA) Fine Arts fair &  
Exhibition (Varanasi, INDIA)  
横浜の森美術館2 (神奈川県)  
パブリックコレクシ  
ョン  
2008年 「RAINBOW PLANET」 (hopital  
universitaire paul brousse, Paris,  
France)  
受賞歴  
2008年 大村文子基金第10回女子美パリ賞 受  
賞。海外研修派遣員としてフランスに  
滞在中  
2010年 はまぎん財団賞受賞 (神奈川県美術展)



## 2009年度 卒業(修了)制作展

### 短期大学部



### ●平成21年度 卒業制作賞・修了制作賞・優秀作品賞 受賞者(短期大学部)

#### 【卒業制作賞】

【造形学科】美術コース	(絵画)	宮澤 春香 木下 知美 林 淑美
【造形学科】デザインコース	(彫塑)	島崎 杏美 関根 美由紀
・情報メディア系		小西 佳奈子
・空間インターフェイス系		石橋 久世 森 紘子 角田 麻美
・クラフトデザイン系	(陶芸・メタル) (テキスタイル) (刺繍)	

#### 【優秀作品賞】

【造形学科】美術コース	(絵画)	高梨 温子 渡邊 るい 栢木 香織 近藤 綾佳
【造形学科】デザインコース	(彫塑)	小池 朋子 芝田 綾夏 本郷 里奈 米島 みゆう 江塚 奈々 田中 春奈
・情報メディア系		
・空間インターフェイス系		

・クラフトデザイン系 (テキスタイル) 島本 有里  
(刺繍) 町崎 好美

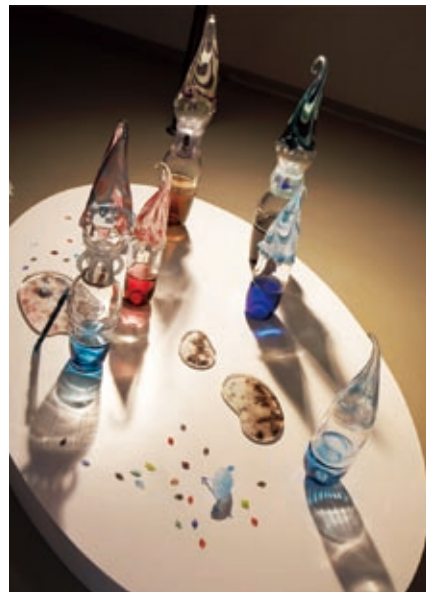
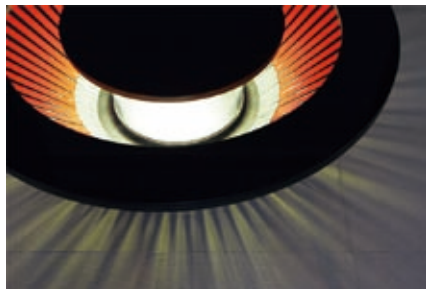
【専攻科】造形専攻  
・美術コース (絵画) 河野 仁美

・工芸デザインコース  
(陶芸・メタル) 片瀬 有美子  
(テキスタイル) 岩井 佐代  
曾我 明花

# Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

## 芸術学部・大学院



### ●平成21年度 卒業制作賞・優秀作品賞・卒業研究賞・優秀研究賞 受賞者(芸術学部)

#### 〔卒業制作賞〕

〔絵画学科〕 洋画専攻

小林 文香  
清水 香帆  
中村 明  
山下 道子  
小泉 恵  
平田 真澄  
立澤 香織  
渡邊 瑠子  
田口 こそえ  
玉田 翔子  
井上 尚己  
川原田 暢子  
吉田 ますみ  
北澤 友理

〔絵画学科〕 日本画専攻

〔工芸学科〕

〔立体アート学科〕

〔デザイン学科〕

〔メディアアート学科〕

〔ファッション造形学科〕

#### 〔卒業研究賞〕

〔芸術学科〕

友岡 あゆ子

#### 〔優秀作品賞〕

〔絵画学科〕 洋画専攻

齊藤 加代子  
高橋 舞子  
牧 阿佑美  
富樫 早智  
木村 史穂  
丸山 裕希子  
梶野 なぎさ  
宮崎 麻奈  
小原 彩  
山口 瑞季

〔絵画学科〕 日本画専攻

〔工芸学科〕

〔立体アート学科〕

〔デザイン学科〕

佐藤 麻美  
佐藤 奈津子  
柴谷 麻以  
瀬古 泰加  
谷川 沙緒理  
藤原 光子  
吉野 彩香  
小川 晴代  
高橋 聖奈  
柳澤 杏奈  
池 佑樹  
庄司 周子  
山本 佳那

〔メディアアート学科〕

〔ファッション造形学科〕

#### 〔優秀研究賞〕

〔芸術学科〕

石黒 久美子  
阿部 真矢子

# Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN



## 学外卒業・修了制作展

### 大学院 美術研究科

●美術専攻版画研究領域  
「女子美術大学大学院学外修了展」  
1月25日～1月30日 (養清堂画廊)

●美術専攻工芸研究領域 (陶・織)  
2月23日～3月4日 (GALLERY le bain)

### 芸術学部

●絵画学科洋画専攻 版画コース  
「女子美術大学版画コース学外卒制展」  
1月25日～1月30日 (文房堂ギャラリー)

●工芸学科 (染・織・ガラス・陶コース)  
「女子美術大学芸術学部工芸学科卒業制作学外展」  
2月20日～2月28日 (Bank ART Studio NYK)

●デザイン学科 ヴィジュアルデザインコース  
「女子美交響曲」  
3月20日～3月22日 (ラフォーレミュージアム原宿)

●デザイン学科 環境デザインコース  
「Environmental Design?」  
3月17日～20日/3月24日～27日  
(タチカワ銀座スペース Atte)

●デザイン学科 プロダクトデザインコース  
「JOSHIBI PRODUCT DESIGN GRADUATION WORKS 2010」  
3月20日～3月22日 (LA COLLEZIONE)

●メディアアート学科  
「\*～アスタリスク～」  
3月3日～3月8日 (横浜赤レンガ倉庫1号館2階)

●ファッション造形学科  
「平成21年度女子美術大学ファッション造形学科有志卒業制作展」  
2月27日～2月28日 (SPEAK FOR SPACE)

### 短期大学部 造形学科

●デザインコースクラフトデザイン系 陶芸・メタルデザイン  
「陶芸・金工・漆芸 展」  
2月14日～2月20日 (ギャラリー青羅)

●デザインコースクラフトデザイン系テキスタイルデザイン  
「女子美術大学短期大学部 テキスタイルデザイン卒業制作学外展」  
2月23日～2月28日 (銀座アートホール)

### 平成21年度 加藤成之記念賞

<大学院>  
美術研究科修士課程デザイン専攻ヒーリング  
造形研究領域

沼尾 めぐみ

<芸術学部>  
絵画学科 洋画専攻  
絵画学科 日本画専攻  
工芸学科  
立体アート学科  
デザイン学科  
メディアアート学科  
ファッション造形学科  
芸術学科  
<短期大学部>  
造形学科  
専攻科

松浦 香奈絵  
岡本 美音  
瑛美 瑛美  
鈴木 雪絵  
後藤 友香  
青木 史織  
横田 菜月  
伊藤 こころ  
山梨 美緒  
庄田 佳未

### 平成21年度 福沢一郎賞

大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画研究領域  
込戸 かな  
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画研究領域  
谷川 直子

### 平成21年度 大久保婦久子賞

大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画研究領域  
山中 綾子  
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 日本画研究領域  
北村 文乃  
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画研究領域  
吉田 ゆう  
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 工芸研究領域  
松永 ちひろ  
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 立体芸術研究領域  
佐野 実果子  
大学院 美術研究科 修士課程 芸術文化専攻  
芸術表象研究領域  
倉茂 なつ子

### 平成21年度 女子美術大学美術館賞

<大学院>  
美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画研究領域  
込戸 かな

<芸術学部>

絵画学科洋画専攻  
絵画学科日本画専攻  
工芸学科  
立体アート学科  
デザイン学科  
メディアアート学科  
ファッション造形学科

松浦 香奈絵  
上田 茉莉  
針谷 ふうみ  
笠原 光咲子  
伊與田 千恵  
村澤 紗也佳  
寺林 紗也佳

<短期大学部>

造形学科美術コース

木下 知美



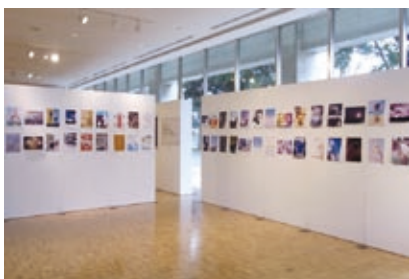
## J A M ● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

### JAM展覧会報告

教育GP IAA+電通+女子美 世界学生ポスターコンペティション

「気候変動」学生ポスター展 - “気候変動”は、目前の現実となっている。- (ロビー展示)

このコンペティションは、アートとデザインを学ぶ世界の学生を対象に、喫緊の課題である「気候変動」をテーマとしたポスター制作を呼びかけ、世界に発信することにより環境意識を高め、アートとデザインの手法による広告表現の技術向上を目的としています。本展示ではグランプリを受賞した作品と、女子美学生の作品の一部を紹介しました。(2010年1月13日~2月4日)



### 平成21年度女子美術大学大学院修了制作作品展

平成21年度に大学院美術研究科を修了する学生の修了制作を約50点展示しました。(2010年3月9日~3月20日)



### JAM展覧会予告

Identity わたしがIするわたしの時間 芸術学科4年生プロデュースによる展覧会です。(2010年4月14日~5月5日)

日本画をまなぶー女子美術学校における日本画教育

今年、創立110周年を迎える女子美術大学は、創立時より日本画科を設置し、現在に至るまで日本画教育を行ってきました。相次ぐ校舎火災などにより、戦前の教育内容を伝える資料は失われ、本学の日本画教育についても体系的に語ることは困難な状況ですが、現在調査し得る限りで明らかになった戦前の本学教員、卒業生の作品資料を紹介し、女子美術学校・女子美術専門学校における日本画教育を振り返る展覧会を行います。柿内青葉、三谷十糸子など1900年~1940年代までの日本画科教員・卒業生の作品を紹介します。

(2010年5月14日~6月6日)

### The Age of micro voyage (極小航海時代)

ポルトガルの現代美術作家による展覧会です。大陸の西端、日本の対極に位置するポルトガルの現代美術は、ヨーロッパにおいても独特な位置を占め注目を集めています。南蛮屏風やサッカーではない、ポルトガルの現在を感じてください。

(2010年6月19日~8月1日)

### 女子美ギャラリーニケ展覧会報告

Paper Works展 女子美術大学+アメリカ4大学 国際交流展

アメリカの美術大学4校と本学の教員・学生による紙のアート作品の展覧会。

※関連記事17ページ参照

企画: 小山欽也(現芸術学部美術学科立体アート専攻教授) (2010年1月7日~1月23日)

はっぴー♡ぱんつ展2 キテレッツけだらケルーム

はっぴい♡ぱんつ(櫻井彩、メディアアート学科卒業)の個展。フェルトで作ったオブジェ、ぬいぐるみ、平面作品を展示。

企画: 杉田敦(現芸術学部美術学科芸術表現専攻教授) (2010年1月28日~2月13日)

『変態』臼井法子展

臼井法子(短期大学部造形学科デザインコース卒業)の個展。ドローイングやインスタレーションによる展覧会。

企画: 伊勢克也(短期大学部造形学科デザインコース教授)

(2010年2月17日~3月6日)

『美術の教科書/暮らしの手帳』

1995年から2010年までの女子美術大学短期大学部旧情報デザイン専攻、現在デザインコース情報メディア系学生の作品を展示。

企画: 伊勢克也(短期大学部造形学科デザインコース教授)

(2010年3月10日~3月27日)

### 銀座gallery女子美 展覧会報告

曖昧の培養 柴田菜月展

柴田菜月(現デザイン・工芸学科工芸専攻非常勤講師)の個展。陶板の上に、骨や細胞を連想させる有機的な形の陶作品を展示。

(2010年1月14日~2月20日)



### Stitch&Stitch展

本学教員5名による刺繍作品展。

(2010年2月25日~3月27日)

### 学外作品展

第1回作品展 アートの旗手

杉並区役所内区民ギャラリーにて、本学芸術学部の教員による作品展「アートの旗手」が開催されました。佐野学長の作品をはじめ、20点以上の作品が展示されました。(2009年11月12日~12月13日)



## Topics ● 10 100周年記念 大村文子基金 平成21年度 女子美美術奨励賞

女子美美術奨励賞（付属高校・中学校生対象）は本学付属生徒の美術活動を奨励する賞です。右記の通り、本年度の「付属高校生」の受賞者が決定しました。

### ◇100周年記念大村文子基金募集について

同窓生を対象に制作・研究活動の奨励等を目的とした「女子美パリ賞」「女子美ミラノ賞」「女子美制作・研究奨励賞」を毎年募集しています。今年度の募集受付期間等

### 高校生受賞者

重野 葵 女子美術大学付属高等学校 3年

豊泉 奈々子 女子美術大学付属高等学校 3年

### 中学生受賞者

加藤 英里 女子美術大学付属中学校 3年

の詳細については、本学ウェブサイトをご覧ください。

URL : <http://www.joshibi.ac.jp/campuslife/incentive/foundation>

【お問い合わせ先】

杉並学生支援センター TEL : 03-5340-4507

E-mail : [ecp-j@venus.joshibi.jp](mailto:ecp-j@venus.joshibi.jp)

相模原学生支援センター TEL : 042-778-6636

E-mail : [ecp-c@venus.joshibi.jp](mailto:ecp-c@venus.joshibi.jp)

## NEWS ● 3 杉田 敦教授編集『アートで生きる』出版

美術批評家の杉田敦教授（芸術学部美術学科芸術表象専攻）が、アートの世界で様々な仕事をして生きる16人の方とおこなった対話が、書籍化されて出版されました。作家、批評家、キュレーター、ギャラリスト、アートプロデューサー、教員など、現代アートの第一線に関わって仕事をする16人のお話は、これからアートに関係する仕事に携わっていきたい方には必読です。

掲載されている「アートで生きる」16人  
山下美幸、伊藤ガビン、福土朋子、眞田岳彦、蔵屋美香、笠原美智子、逢坂恵理子、南嵩宏、北川フラム、千葉由美子、北澤憲昭、ヨルゲン・ボック、竹内万里子、キム・ヒョンジン、杉田敦、オクウィ・エンヴェゾー

「アートで生きる」 杉田敦編

価格：2,100円 出版：株式会社美術出版社



## NEWS ● 4 学生のプロジェクトがボランティア団体助成に採択

大学院美術研究科修士課程美術専攻立体系芸術研究領域在学中の岡田蘭子さん他、女子美術大学の学生が中心となって行っている、高橋のらくろ〜ど商店街（東京都江東区）での地域活動「高橋アートプロジェクト」が（財）学生サポートセンター主催「第7回学生ボランティア団体助成」において、助成に採択されました。「高橋アートプロジェクト」は、2006年に杉田敦教授（芸術学部美術学科芸術表象専攻）の授業の一

環として、商店街で開催した展覧会「S靴店の長グツの裏」をきっかけに始まった、江東区高橋のらくろ〜ど商店街との地域交流活動に端を発しています。商店街とその周辺の街に根ざしたアートの可能性を探るプロジェクトとして、岡田さんが実行委員会代表になり、2008年2月に発足しました。地域の方々と協力しながら、アートと商業の双方の立場から商店街の活性化に取り組んでいます。



プロジェクト代表の岡田蘭子さんと、芸術学部絵画学科洋画専攻1年の榎本彩乃さん(左)と同じく洋画専攻1年の塩山晶子さん(右)

## Topics ● 11 公募展 受賞者紹介

### 福島県矢祭町 第1回手づくり絵本コンクール

#### 一般の部最優秀賞

加藤祐子（芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコース3年）

### ジャパン・テキスタイルコンテスト 2009

#### シーズ賞

三原瑞葵（大学院美術研究科修士課程美術専攻工芸研究領域2年）

### 第16回 鹿沼市立川上澄生美術館 木版画大賞

小林文香（芸術学部絵画学科洋画専攻版画コース4年）

### 第73回 新制作展 入選

高田文（芸術学部立体系アート学科4年）

### 第83回 国展 入選

谷田部由美（大学院美術研究科修士課程美術専攻立体系芸術研究領域2年）

※受賞者の在籍学部、学科、学年等は受賞時のものを記載しています。

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎号無料でお送りしております。ご希望される場合は、お送り先を広報入試課まで連絡ください。

また、広報入試課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。

〈広報入試課〉 TEL. 042-778-6123

FAX. 042-778-6692

[E-mail] [prs@venus.joshibi.jp](mailto:prs@venus.joshibi.jp)

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

発行 学校法人 女子美術大学

〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8

企画・編集 企画部 広報入試課

制作・印刷 株式会社 日相印刷

監修 山本 吉男

発行日 2010年4月1日